

【資 料】

明治前期の芸娼妓関係判決 (補遺2)

村 上 一 博

目 次

補遺にあたって

【A】芸娼妓関係判決一覧 (判決言渡年月日順)

【B】判決例の翻刻

[1] ~ [29] ……第 88 巻 2=3 合併号

[30] ~ [55] ……本号

明治 16 年

[30] 「復籍請求之訴訟」 (東京始審裁判所、M16・02・一判決)

明治 15 年第 2060 号

所長 池田㊞

児玉 判事㊞

大蔵 全補㊞

納富 全補㊞

裁判言渡書

東京府神田区平民

原告 前 田 七之助

東京府下谷区平民

被告 池 田 治郎吉

同府京橋区平民安井孝輔方寄留岡山県平民

右代人 荒 木 岩太郎

復籍請求之訴訟ヲ審按スル処

被告代人ニ於テ原告ノ妹「イト」ナル者ハ明治十五年四月廿八日抱芸妓ト為シ送籍

ヲ受タルコト無相違モ明治十五年七月廿日抱ヲ止メ其後前借金四拾円外損害トシテ貳拾円ノ訟求ヲ為シタル末身代限ヲ出シ一金モ受取ラサルヲ以テ此上幾分カ入金ヲ得サレハ送籍為シ難シト申立ルト雖トモ既ニ今金円ノ故ヲ以テ「イト」カ送籍ヲ拒ムハ恰モ人身ヲ抵当ト為スカ如キ所為ニテ甚タ不当ノ抗弁ナリトス

判決

被告ハ速ニ「イト」復籍ノ手續ヲ尽スヘシ

但訴訟入費ハ被告ノ負担タルヘシ

明治十六年二月〔日不明〕 東京始審裁判所

〔31〕「貸金催促ノ詞訟」（芝区裁判所、M16・04・一判決）

明治 16 年第 189 号

主任 中島判事補㊦

裁判言渡書

原告東京府南豊島郡平民大林フサ代人同人方同居
平民

井 関 晋 蔵

被告全府芝区村田友吉方同居士族

村 田 鐘

全 同府浅草区伊藤金太郎方同居

伊 藤 清 八

貸金催促ノ訴訟始審ノ裁判ヲナス左ノ如シ

第一条

被告村田鐘ニ於テ去ル明治十四年七月中原告大森フサ方ヘ山田タキト偽名シ娼妓出稼ヲナセシガ爾後該件発露シ終ニ明治十六年二月十三日東京輕罪裁判所ニ於テ収贖金七拾五銭ノ処分ヲ蒙リタリ而シテ本訴原告カ提供スル証書ノ印影ハ前陳ノ如ク山田タキト偽称中ニ使用シタル印章ニ相違ナキモ該証差入タル覺毫モ之レナキ而已ナラス本訴四円ノ金額借用シタル儀ハ勿論之レナキ旨申張スルモ該証ノ印影ハ自己ノ嘗テ使用セシモノニ相違ナキ旨自認スルノミナラス被告前陳偽名ヲ以テ娼妓出稼キナシタルトノ情況ヲ察スレ〔ハ〕総テ虚構ノ妄言ニシテ本訴ノ金額連借セシモノト認定ス

第二条

被告伊藤清八ニ於テ本訴証書ハ山田カキ即チ本名村田鐘ト連帶ニ登記シアルモ實際
自己一人ニテ費用シタルモノナレハ鐘ニ関セス明治十六年五月迄ニ弁済スベキニ付
延期ヲ受ケ度旨陳弁スルト雖モ前条ノ理由ナルニヨリ村田鐘兩人ニテ弁済スヘキ
モノトス而シテ次ニ明治十六年五月迄返済延期ハ原告之ヲ肯認セサルトハ強請ス
ルヲ得ヘカラサルニ付本訴ノ金額ニ訴訟入費ヲ併セ被告兩人ヨリ速ニ完済スヘシ
明治十六年四月〔日不明〕 所名〔芝区裁判所〕

〔32〕「貸金催促ノ訴訟」（東京始審裁判所、M16・04・27 判決）

明治 16 年第 470 号

所長 池田㊦

判 事 古賀明銓㊦

判事補 中谷速水㊦

判事補 山岡義五郎㊦

裁判言渡書

東京府南豊島郡平民

原告 大 林 フ サ

同人方雇人

右代人 井 関 晋 蔵

同府芝区村田友吉方同居士族山田タキ事

被告 村 田 鐘

貸金催促ノ訴訟審按スル処

被告ニ於テ本訴甲号証ノ契約ヲ為シ原告方ヘ娼妓出稼中其稼キ高ヲ以テ返済スヘ
キ約ニテ該金円借用セシモ保証人伊藤清八於テ悉皆使用シ被告ハ一金モ之レヲ使
用セサレハ清八於テ弁済スヘキハ当然ナリト陳弁スト雖トモ既ニ被告ハ白ラ甲号
証ノ借主トナリ自己ノ稼高ヲ以テ返済スヘキ約ニテ借受ケタル金額ナレハ仮令保
証人ノ使用スル所ニ係ルモ中途ニシテ其娼妓出稼ヲ廃棄シ当初ノ目的ヲ達セサリ
シ上ハ原告ニ対シテ条理上被告ニ於テ返済ノ義務免レ能ハサルモノトス

判決

如斯理由ナルニ依リ被告ハ本訴請求ノ元金百五拾円ノ内ヨリ稼高貳円拾毫錢五厘
五毛ヲ差引其殘金ニ契約ノ利息ヲ加ヘ速ニ完済スヘシ

但訴訟入費ハ被告ヨリ償却スヘシ

明治十六年四月廿七日

東京始審裁判所

[33]「貸金請求ノ詞訟」(名古屋始審裁判所、M16・09・29 判決)

明治 16 年第 1067 号

所長 小松弘隆㊞

主 丸山判事補㊞

副 磯谷判事補㊞

済方執行言渡書

愛知県尾張国名古屋区平民

原告 中 川 謙 三

愛知県尾張国名古屋区平民中村正平代人同県同
国同区平民

被告 加 藤 嘉兵衛

同県同国同区平民

同 高 津 八 重

同県同国同区平民

同 早 川 ハ マ

本訴ハ貸金催促ノ詞訟ニシテ被告中村正平高津八重ニ於テ甲第一号証ノ如ク早川
ハマ出稼証券ヲ抵当トシテ原告ヨリ金員ヲ借受タルニ相違ナク被告兩名ヨリ返金
スヘキモ現今金策不行届ニ付暫時猶予ヲ受度旨陳述スルハ既ニ返金ノ義務アルコ
トヲ確認シタル後単ニ猶予ヲ求ムルノミニ過サルヲ以テ原告ニ於テ之レカ承諾ヲ
与ヘサル限りハ強テ要ムルノ權利ナキ者ナレハ本訴金額百六十円ハ速ニ被告兩名
ヨリ返済シ併セテ訴訟入費ヲ弁償スヘシ

明治十六年九月廿九日

名古屋始審裁判所

明治 17 年

[34]「貸金催促ノ詞訟」(東京始審裁判所、M17・04・12 判決)

明治 17 年第 185 号

所長 池田㊦

松野判事㊦

高田判事補㊦

中谷判事補㊦

裁判言渡書

東京府南豊島郡平民

原告 大 森 フ サ

東京府四谷区平民

右代人 戸 山 八兵衛

東京府浅草区平民武本常吉総理代人同居平民

被告 竹 村 晴三郎

貸金催促ノ詞訟審理判決如左

被告人答弁ノ要領ハ甲一号証ハ元ト五十嵐スエナル者前借金三百円ヲ以テ原告方ニ娼妓出稼キ致居ル処其後原告ノ依頼ニヨリ右スエヲ被告方ニ住替ヘ致サセタル節被告ノ借金トシテ差入タル者ニシテ固ト稼高ヲ以テ償却ス可キ契約ニ付今ヤスエガ眼病ニヨリ廃業シタル上ハスエヲ差戻ス可クトモ金円償却ス可キ義務ハ無之ト云フニアレ共既ニ五十嵐スエカ被告方ニ稼替ヘシテ其原告人ヨリノ前借金ハ甲一号証ノ如ク被告カ借金ト改メ而シテ五十嵐スエヨリハ更ニ被告ヘ契約書差入タル上ハ固ヨリ被告カ義務ニ更改シタル者ニ付今ヤ五十嵐スエカ娼妓廃業シタレハトテ特別ノ契約ナキ限りハ之ヲ以テ該借金ノ弁償拒ムヲ得ス依テ被告ハ原告請求スル金三百十五円ヲ返済ス可シ

但訴訟入費ハ被告ノ担当トス

明治十七年四月十二日

東京始審裁判所

〔35〕「貸金催促ノ詞訟」（麹町区裁判所、M17・04・19 判決）

明治 17 年第 96 号

所長 中川渚㊦

主判事補 兼松喬寿㊦

副同 堀内式具㊦

裁判言渡書

原告東京府南豊島郡平民貸座敷渡世大森フサ代

同府四谷区平民

戸 山 八兵衛

被告同府南豊島郡平民雑業

中 村 万 吉

同 同府浅草区平民貸座敷渡世武本常吉総理代人
士族籍

竹 村 晴三郎

貸金催促ノ詞訟始審ノ裁判左ノ如シ

原告代人ハ本訴甲号証ノ金円ヲ被告兩名ヨリ償却受度旨申立ルト雖該証ノ成立タルヤ被告武本常吉カ金拾五円入用ニ付借用ノ儀ヲ中村万吉ヲ口入トシテ依頼アルモ常吉壱名ノ借主ニテハ不都合ナルニ付右万吉モ連借ノ姿ニ相成ル様ニ談判及ヒシモノナリト自陳スルノミナラス本訴状中ニ右原告人大森フサ強テ奉詞訟候金円ノ起因タルヤ被告ハ貸座敷ヲ営業トシ居ル者ニテ金円差間ノ赴ヲ以テ元手金借用ナシ度旨被申聞候ニ付不得止原告ハ証書ノ如ク金円貸与タリト記載シアルハ事実ノ成立ヲ開申シタルモノニシテ当時武本常吉ハ貸座敷営業致シ中村万吉ハ差定リシ渡世無之モノナレハ甲号証ノ金員借主ハ武本常吉ニシテ中村万吉ハ保証人ナルコト瞭然ナリトス然レハ即チ事実借主タル武本常吉ヘ返金ヲ促スヘキ筋合ナルヲ強テ被告兩名ヨリ返済受ケ度トノ当初原告要求不相立

但訴訟入費ハヒ告中村万吉分ハ原告ヨリ償却シ原告及ヒ告武本常吉ハ各自弁タルヘシ

明治七年四月十九日 [麹町区裁判所]

関連：供述調書六通

①

原告代

戸 山 八兵衛

一本訴甲号証ノ金円ハ被告兩名ヘ貸与シタルモノニシテ其連借人中ニテ互ヒニ使用スル儀ハ原告ハ更ニ承知不致候事

一乙第壱号証ハ大森善兵衛ト被告武本常吉トノ間ニ成立タルモノニシテ原告カ右善兵衛ヘ該件ヲ委任シタルモノニ無之事

一乙第二号証ハ娼妓五十嵐スゑカ明治十六年十月中原告方ニ出稼中ノ精算ヲ要スルニ就テ同人ヘ差遣シタル計算書ニ付本訴ニ関係無之事

一甲号証ノ金円ハ現金ニテ貸与ヘタルモノニテ道具及ヒ品代金等ヲ該証ニ取結ヒタルモノニハ一切無之事

明治十七年四月二日

右

戸 山 八兵衛[㊟]

② 第九十六号

原告代

戸 山 八兵衛

一甲号証ノ成立ハ被告ノ内中村万吉ヨリ申聞候ニハ武本常吉カ金拾五円入用ニ付而者右万吉モ連借ノ名義ニ相成ヘク間用立呉候様ニトノ依頼ニ付右金円ハ中村万吉ヘ相渡中候事

一最初中村万吉ハ口入人ナリシモ前書常吉壱名カ借主ハ不都合ニ付右万吉モ連借ノ姿ニ相成候様ニ談判及ヒシモノナリ

一被告ノ内武本常吉ハ貸座敷営業ニテ身元相応ノ者又中村万吉ハ差定リタル営業ハ無之只得意先ノ使等ヲナシ活計ヲ立居モノニ付常吉ヨリ見レハ身薄ノ者ナリ

一両条ニ陳述シタル他ハ本訴状ニ記載アル手續キニ聊相違無之事

一前書ニ申立ル通り中村万吉ヘ連借ニ相成候様申聞候ニ依リ甲号証中村万吉ノ頭書ニ立合人ト記シアリシヲ張帑致シ其雇人借主ノ名義ヲ記載致サセ可キノ処不心付其俣ニ打捨置タルモノナリ

明治十七年四月十一日

右

戸 山 八兵衛[㊟]

一前陳ノ如キ成立ナレトモ甲号証ハ連借ノモノナレハ原告ハ飽迄被告両名ヨリ償却受度候付正當ノ御判決ヲ相願候事

明治十七年四月十四日

右

戸 山 八兵衛[㊟]

③

被告武本常吉総理代人

竹 村 晴三郎

一原告捧呈スル甲号証ハ交付シタルニ相違ナキモ該証ノ成立ハ原告方ニ出稼罷在候娼妓五十嵐スル儀明治十六年十月三十日被告方ヘ出稼替ニ相成候際右スルカ原告方ニ出稼中買上ケタル道具及ヒ品代金ノ拾五円ヲ甲号証ニ取結ヒシタルモノナレトモ該代金ハ乙第二号証第六項目ノメ高二拾三円三十壱銭三厘トアリテ該証総高ノ差引残金貳百六十九円四十銭貳厘六毛□□ヲ原被告協議上前書スル

ヲ三百十五円ノ契約金ニテ被告□□引受タレハ前陳ノ道具品代金ヲ二重ニ払フ
ヘキ理由無之事

一乙第二号証ハ原告ヨリ五十嵐スルヘ付与シタルモノナリ

一五十嵐スルノ実父五十嵐岩吉及ヒすい〔系〕トモニ住替ノ儀ハ更ニ存不申事

明治十七年四月二日

右

竹 村 晴三郎㊤

④

被告代

竹 村 晴三郎

一訴外明治十六年十月三十日附ニテ被告ヨリ原告ヘ差入アル金三百円ノ事件ハ現
今東京始審裁判所ニテ御審問中之処該件ニ対シ原告カ中立タル明治十七年四月
四日ノ口供中ニ本件ノ拾五円ハ中村万吉木股ナカ等ノ周旋ニテ被告人貸与ヘタ
ルモノナリト陳述シアルニ付中村万吉カ使用セサルコトハ明瞭ナレハ該謄本ヲ
后日証拠トシテ捧呈可致候事

一本件ノ金円ヲ道具代ナリト主張スルモ其証拠トナルヘキモノハ無之事

明治十七年四月八日

右

竹 村 晴三郎㊤

一本日引合五十嵐スルカ陳述シタル手續キヲ視レハ乙第二号証ノ道具代計算云々
ハ事実ニ相違アルニ付該証ハ証拠ニ不相成ニ付□□□相願候事

一本日原告代人カ甲号証ノ成立ヲ陳述セシ順序ヲ視レハ武本常吉名カ被告トナ
ルヘキヲ金円使用セサルノミナラス只連借人ノ名義ノミハ勿論立合人ナル中村
万吉ト共ニ被告トスルハ原告起訴ノ手續キヲ誤リタルモノニ付旁応スヘキ理由
ハ無之事

一本件ニ付別段ニ可申立儀無之事

明治十七年四月十一日

右

竹 村 晴三郎㊤

⑤

被告

中 村 万 吉

一原告捧呈スル甲号証ハ交付シタルニ相違ナキモ該証ノ金十五円ハ武本常吉カ使
用セシモノニ付自分儀ハ連借ノ名義ノミニ付右武本常吉ヨリ返金スヘキカ当然
ニ付自分ニ於テハ共ニ返済スヘキ義務無之事

但本文武本常吉名ノ使用セシ儀ヲ証明スヘキモノハ更ニ無之事

明治十七年四月二日

右

中 村 万 吉

一本日甲号証成立ニ就キ其理由ヲ原告代人戸山八兵衛カ陳述セシ廉ニハ聊相違無之事

明治十七年四月十一日

右

中 村 万 吉㊟

⑥ 浅草区新吉原角町九番地貸座敷渡世武本常吉方
出稼娼妓

引合

五十嵐 す 糸

一本訴甲号証ノ拾五円ハ自分儀原告方ヨリ明治十六年十月三十日ニ被告方へ出稼替ニ相成タル際道具及ヒ品代金ヲ該証ニ取結ヒタルモノナレトモ之レヲ証明スヘキモノ無之事

明治十七年四月十一日

右

五十嵐 す 糸㊟

〔36〕「貸金催促ノ詞訟」（麹町区裁判所、M17-04-19 判決）

明治 17 年第 97 号

所長 中川渚㊟

主判事補 兼松喬寿㊟

副同

堀内式具㊟

裁判言渡書

原告東京府南豊島郡平民貸座敷渡世大森フサ代同
府四谷区平民

戸 山 八兵衛

被告同府南豊島郡平民雑業

中 村 万 吉

同 同府浅草区平民貸座敷渡世武本常吉総理代人
士族籍

竹 村 晴三郎

貸金催促ノ詞訟始審ノ裁判左ノ如シ

原告代人ハ本訴甲号証ノ金円ヲ被告兩名ヨリ償却受度旨申立ルト雖該証タルヤ本
衙明治十七年第九十六号ノ訴件ニ対スル証書ト同一ノ趣旨ニ成立シタルモノナリ
ト原告開申スルヲ視レハ該件裁判所ノ通事實借主ハ武本常吉它名ニシテ中村万吉
ハ保証人ナルヲ強テ兩名ヨリ返金受ケ度トノ当初原告請求不相立モノナリ

訴訟入費ハヒ告中村万吉分ハ原告ヨリ償却シヒ告武本常吉及原告分ハ各自弁タ
ルヘシ

明治十七年四月十九日 [麴町区裁判所]

関連：供述調書五通

① 第九十七

原告 戸 山 八兵衛

一本訴甲号証ノ拾円ハ被告兩名ヘ貸与シタルモノニ付其連借人中ニテ互ヒニ使用
スル儀ハ更ニ原告ハ承知不致候事

一前書ノ金拾円ハ原告方ヘ元出稼罷在候栗原むめノ契約金払残リヲ証書ニ取結ヒ
タルモノニハ決シテ無之事

明治十七年四月二日 右

戸 山 八兵衛㊟

②

原告代

戸 山 八兵衛

一甲号証ノ成立ハ本日本衙第九十六号ノ訴件ニ対シ陳述致シタル第一項ヨリ第四
項ニ至ル如キ手續キニ聊相違無之事

明治十七年四月十一日 右

戸 山 八兵衛㊟

一本日引合人栗原むめ申立ル通り同人出稼替之節原告方ヘ受取タル契約金ハ百六
十円ニ有之事

明治十七年四月十一日 右

戸 山 八兵衛㊟

一本件甲号証ノ成立ハ本衙明治十七年第九十六号ニ対シ明治十七年四月十一日口
供ノ如クナレトモ該証ハ矢張連帶ノ名義ニ付原告ハ飽迄被告兩名ヨリ償却受度
候ニ付正当ノ御判決ヲ相願候事

明治十七年四月十四日

右

戸 山 八兵衛㊤

③ 第九十七号

被告武本常吉総理代人

竹 村 晴三郎

一原告捧呈スル甲号証ハ交付シタルニ相違ナキモ該証ノ成立ハ原告方ニ出稼罷在
候娼妓栗原むめヲ明治十六年十月三十日被告方へ出稼替ニ相成候時其契約金ハ
百六十円ニ付該金員ノ内百五十円相渡シタル残金十円ヲ甲号証ニ取結ヒタルモ
ノナリ然ルニ右むめ儀ハ所勞ニテ營業致シ兼日下休業致シ居モノニ付乙号証ニ
他所稼換致シ候節契約金不足分云々トアル明文ニ依リ原告ヘ甲号証ノ金円ヲ返
済スヘキ筋合ノモノニ無之事

明治十七年四月二日

右

武^(マツ)村 晴三郎㊤

一本件ニ就テハ乙号証ノ外証拠トナルヘキモノ更ニ無之事

明治十七年四月一日

右

武^(マツ)村 晴三郎㊤

一本訴甲号証ノ成立ハ本衙明治十七年第九十六号ノ訴件ト同一ナレハ本件モ被告
ハ竹本常吉壺名ナルニ否ラスシテ中村万吉共ニ被告トスルハ原告起訴ノ手續ヲ
誤リタルモノニ付原告ノ求メニ応シ難ク其他可申立儀無之事

明治十七年四月十一日

右

武^(マツ)村 晴三郎㊤

④ 第九十七号

被告

中 村 万 吉口供

一原告捧呈スル甲号証ノ金十円ハ武本常吉カ使用セシモノニテ自分儀ハ只連借ノ
名義ノミニ付該金円ハ右常吉ヨリ返金スヘキハ当然ナレトモ自分カ共ニ連帶ノ
義務ヲ尽スヘキモノニハ無之依テ本訴ノ求メニ難応候事

但本文武本常吉壺名ノ使用シタル儀ニ就テハ証明スヘキモノ更ニ無之事

明治十七年四月二日

右

中 村 万 吉㊤

一甲号証ノ成立タル手續キハ本ハ原告代人戸山八兵衛カ陳述致シタル通り聊相違無之事

明治十七年四月十一日

右

中 村 万 吉[㊟]

⑤

浅草区新吉原角町九番地貸座敷渡世竹本常吉^(ママ)

方出稼娼妓

引合

栗 木 む め

一自分儀昨明治十六年十月三十日ニ原告方ヨリ被告方へ出稼替ニ相成タル時原告へ払ヘキ契約金ハ百六十円ニ有之候事

一前条ノ百六十円ノ内百五十円被告ヨリ原告人相払其殘金拾円ヲ本訴甲号証ニ取結ヒタルモノニハ相違無之候得トモ右ヲ証明スヘキモノ無之事

一自分儀ハ日下所勞ニテ休業致シ宿元ニ罷在候事

明治十七年四月十一日

右

栗 原 む め[㊟]

〔37〕「貸金弁償要求ト訴目ヲ附スル詞訟」(京都始審裁判所、M17・06・24 判決)
明治 17 年第 292 号

堤[㊟]

裁判言渡書

京都府下京区平民桑山菊太郎後見人桑山ノフ代
言人同府平民

原告 神 戸 義 福

同府同区平民藤井ウタ代人平民

被告 澤 野 久三郎

貸金弁償要求ト訴目ヲ附スル詞訟審理判決スル左ノ如シ

被告於テ本訴借入金ハ連借人ノ内藤井「アイ」カ芸妓営業ヲ為スニ際シ其衣類ヲ新調スルカ為メ借用セシ者ニシテ爾後「アイ」ヨリ毎月営業上リ金ヲ以テ返済シ都合二十一ヶ月ニシテ其金高五百五拾八円五錢壹厘九毛ハ全ク本訴借入金ニ対シ返済シタルニ付却テ返済過剰ナルヲ以テ原告カ本訴ノ請求ニハ応シ難シト抗弁スレトモ原告於テ其藤井「アイ」ヨリ受取りタル五百五拾八円五錢壹厘九毛ハ別途取換金

ノ内へ受取りタル者ナリト云ヒ而シテ被告ハ該五百五拾八円五錢壹厘九毛ハ本訴借用金ニ対シ返済シタルトノ確証ヲ挙示スル能ハス且ツ曩キニ藤井「アイ」カ原告ヨリ甲第一号証ノ貸金請求ノ詞訟ヲ受ケタル節「アイ」於テ該五百五拾八円五錢壹厘九毛ハ甲第一号証借用金ニ対シ返済シタル者ナリトノ旨趣ヲ以テ答弁シタレトモ其申立相立タス乃チ該返済金ハ別途取替金ノ内へ差入レタル者ニシテ甲第一号証ニ対シ返済シタル者ニアラサルトノ裁判ヲ受ケ其裁判確定シテ「アイ」カ身代限執行済トナリタルニ拠レハ被告カ藤井「アイ」ヨリ返済シタリト云フ五百五拾八円五錢壹厘九毛ハ本訴貸金ニ対シ差入レタル者ニアラサルノ事実ト認定スルニ付本訴借用金ハ已ニ返済過剰ナリト云フヲ以テスル被告ノ抗拒ハ相立タサル者トス右ノ理由ニ付被告ハ原告ノ請求スル元利合計金五百五拾貳円五拾錢ヲ速ニ返済スヘキ者也

但訴訟入費ハ被告ノ負担タルヘシ

京都始審裁判所

明治十七年六月廿四日

判 事 三 浦 峰 高[㊟]

判事補 山 田 豊 作[㊟]

書 記 井 澤 正 直[㊟]

[38]「貸金催促ノ訴訟」（大阪始審裁判所、M17・06・24 判決）

明治 17 年第 933 号

判決書

大坂府平民浅□□次郎代言人

原告 石 澤 齊 造

同府南区平民

被告 成 子 直 七

同府北区平民

被告 鳴 子 忠次郎

同府南区平民

被告 出 中 モ ト

貸金催促ノ訴訟審理ヲ遂クル処本訴ハ被告ノ内田中モト於テ明治十六年五月廿三日原告方ヘ娼妓出稼ヲ為シ其揚金ヲ以負債ヲ償フ筈然ルニ明治十六年九月十六日

モトハ出稼ヲ止メ其実家ニ復帰シタレハ今ヤ原告ノ契券ニ基キ被告三名ヨリ訴金ヲ得ント求ルニアルナリ依テ之ヲ推究シ始審ノ判決ヲ為ス左ノ如シ

被告ノ内田中モト於テハ再ヒ被告方ヘ出稼ヲ為シ当初ノ契約ヲ履行シタシト云フモモトハ已ニ約束ヲ破リ私擅ニ出稼ヲ止メ実家ニ立帰リタル程ノモノナレハ再度ノ出稼キ覚束ナキ旨ヲ以原告□□□ル□□□モトノ情願採用セス又被告ノ内成子直七及鳴子忠次郎ニ於テハ共ニ負債者ニ非スト云フモ原告ノ証書ヲ視ルニ（右ノ金額云々我ホ中ヘ正ニ借用致候）ト有之被告ノ連署セル名□ノ肩書ニ負債主タルコト瞭明記載アレハ被告共ノ申分皆採用セス因テ訴額百十□円五十四銭ト訴訟入費ト被告三名ヨリ償却スヘシ

明治十七年四月[廿四日]

大坂始審裁判所

判 事 高 橋 観 潤

判事補 岡 沢 主一郎

[39]「約定賃金履行ノ詞訟」（東京始審裁判所、M17・10・13 判決）

明治 17 年第 817 号

所長代 木村喬一郎[㊟]

高木豊三判事[㊟]

白井判事補[㊟]

中谷判事補[㊟]

裁判言渡書

東京府浅草区平民

原告 武 本 常 吉

同府同区平民

右代人 深 井 亀 吉

東京府南豊島郡平民

被告 木 俣 ナ カ

同府同郡平民

被告 中 村 万 吉

同府浅草区平民

被告 吉 田 文 蔵

同府四谷区平民

引合人 大 森 善兵衛

約定賃金履行ノ詞訟ヲ審理シテ判決ヲ為ス左ノ如シ

原告代人訴フル要旨ハ引合人大森善兵衛方出稼娼妓ナリシ栗原ムメ五十嵐スエノ
兩人被告共ノ周旋ニ依リ明治十六年十月廿九日原告方へ稼替シ来リタル時甲第三
号証及ヒ甲第六号証ノ金額ヲ貸与シタリ然ルニムメ并スエノ身体ニ疾病アルコト
ヲ発見シタルニ付善兵衛方へ稼替ノ件破談申入タル処甲第二号証ノ通り返書アリ
タル末被告共ノ仲裁ニテ若シ右ムメ并スエノ兩名ヲ他へ稼替へ致サセ其前借金ニ
テ甲三号及ヒ甲六号証ノ貸金即チ契約金ニ弁済不足ヲ生シタル時ハ原告ト引合人
トニ於テ其半額ツ、ヲ負担スヘキ契約ヲナシ被告共ハ善兵衛ノ代人トナリ甲第一
号証ニ調印セシモノニ付引合人善兵衛ヲシテ之カ約定ヲ履行セシメ度ト云フニ在
レ共甲一号証ハ善兵衛カ被告共ニ代理ヲ委託シ以テ締約セシメタリト認ム可キ証
左無キノミナラス栗原ムメ五十嵐スエノ兩人ハ素ト善兵衛方出稼ノ娼妓ナリシモ
爾後原告方出稼娼妓トナリ原告ハ其稼高ヲ目的トシ甲三号証及ヒ甲六号証ノ金額
ヲ貸与シタルモノニシテ原告ト其出稼娼妓トノ間ニ成立チタル金口貸借ノ如キ大
森善兵衛ノ関与セシ事柄ニアラサレハ焉ソ引合人大森善兵衛カ該不足金ノ損害ヲ
負担ス可シトノ契約ヲ為スヘキ条理アランヤ此理由ニ因リ原告ノ訟求ハ不相立

但シ訴訟入費ハ原告ニ於テ負担ス可シ

明治十七年十月十三日

東京始審裁判所

〔40〕「貸金催促ノ控訴」（東京控訴裁判所、M17・10・27 判決）

明治 17 年第 827 号

所 関 伴 ㊦

書記 杉浦知至 ㊦

裁判言渡書

東京府浅草区平民貸座敷渡世

原告 武 本 常 吉

東京府南豊島郡平民貸座敷渡世

被告 大 森 フ サ

東京始審裁判所ノ裁判ニ対スル貸金催促ノ控訴審判左ノ如シ

原告於テ被告方出稼娼妓栗原ムメ及五十嵐スエノ兩人カ原告方へ住換ヘノ際右両

人ノ前借金ヲ甲第壹号証ノ如ク取結ヒ而シテ被告養父大森善兵衛代人木俣ナカ外
三名ト乙第壹号証ノ如ク契約ナシタルモノナレハ該証ニ基キ要求スルハ当然ノコ
トナレトモ単ニ甲第壹号証ヲ以テ請求スルハ不当ナル旨申立ルト雖モ其乙壹号証ハ
大森善兵衛ノ代人ヨリ差入レタルモノニシテ被告ニ於テ之ヲ認メサル限りハ該証
ハ本訴ニ対シ其効力ヲ有セサルモノトス故ニ原告ノ申分不相立結局始審裁判ノ通
リ相心得訴訟入費モ成規ニ照シ原告ヨリ償却ス可シ

明治廿七年十月廿七日

東京控訴裁判所

判事 河 村 応 心[㊞]

判事 永 井 岩之丞[㊞]

判事 関 田 勲 作[㊞]

明治 18 年

[41] 「日賦金淹滞ノ訴訟」(函館治安裁判所、M18・06・05 判決)

明治 17 年第 96 号

裁判言渡書

原告人函館県函館区士族古物商

海 野 教 慧

被告人同県同区平民貸座敷渡世中村ナオ代兼同人
方同居

山 田 精 一

右海野教慧ヨリ中村ナオ山田精一ニ対スル日賦金淹滞ノ訴訟ヲ審理スルニ両造陳
述ノ要旨タル原告ニ於テハ本訴ノ淹滞金廿三円四十銭ニ付テハ更ニ被告ノ申立ル
如キ返済ノ猶予ヲ与ヘシコトナキヲ以テ速カニ之レカ完済ヲ受度シト云ヒ被告ニ
於テハ右淹滞金廿三円四十銭ニ付テハ改テ明治十八年七月一日ヨリ三十銭ツ、ノ
日賦ヲ以テ償却セシコトヲ原告ニ頼入其承認ヲ得タルニ因リ今回ノ要求ニハ応シ
難シト云フニ在リ

因テ証憑ヲ関シテ説明スル左ノ如シ

被告ニ於テハ本件淹滞金廿三円四十銭ノ返済方ニ付原告ヨリ改メテ明治十八年七
月一日以後三十銭ツ、ノ日賦ヲ以テスルコトノ承認ヲ得タル旨申立レトモ果シテ

其承認ヲ得タルモノト信認スヘキ証憑ナキニヨリ右淹滞金ハ原告ノ提供セル借用証書ニ（上略明治十八年一月十六日ヨリ向皆済迄金六十銭ツ、返償ス下略）云々トアル約定ニヨリ直チニ皆済セサルヘカラサルモノナリトス

右理由ニ依リ判決スル左ノ如シ

被告ハ本訴ノ淹滞金貳拾參円四拾銭ヲ原告ニ完償スヘシ

訴訟入費モ被告之ヲ負担スヘシ

明治十八年六月五日兩館治安裁判所公延ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡スモノナリ

兩館治安裁判所

判事補 山 下 次 郎^印

書 記 尾 藤 勝 房^印

[42]「貸金催促ノ事件」（東京始審裁判所、M18・07・21 判決）

明治 18 年第 55 号

裁判言渡書

控訴人東京府浅草区平民湯屋渡世

永 田 秀 則

代人同府同区平民

朝 日 利 助

被控訴人同府同区平民貸座敷渡世

武 本 常 吉

右永田秀則ヨリ武本常吉ニ係ル貸金催促ノ事件ニ付下谷区治安裁判所カ言渡タル裁判ニ服セスシテ永田秀則ヨリ控訴ヲ為シタルニ依リ之ヲ審理シ控訴代人及ヒ被控訴人ノ陳述ヲ聴クニ

控訴代人陳述ノ要領ハ始審廷ニ於テ縦令甲二号証金額ニ付キテハ原告ノ請求不相立モノトセラル、モ甲一号証金額ハ被告ノ確証スル所ナルニ（但甲第壹号証ハ原被問争点ナキヲ以テ別ニ判決ヲ与ヘス）ト判決セラレ被告ヘ何ノ命令モ下サレス又訴訟入費ヲモ猶原告ノ負担ニ帰セシメラレタルハ不当ナルニ就キ該裁判ニ服シ難ク依テ甲壹号証元金五拾円及ヒ利子残金明治十八年六月迄合計六円三拾三錢三厘ヲ速カン受取度見訴訟入費ニ関スル至当ノ裁判アランコトヲ乞フト云フニ在リ被控訴人答弁ノ要領ハ甲一号証金額ハ自分ニ於テ固ヨリ異議ナキモノナレハ明治

十八年四月二日元利取揃自分及ヒ保証人明石清吉并ヒ二田中亀吉ナル者同道ニテ
控訴人方へ持参シタルニ本人留守中ノ由ニテ之ヲ受取サルニ付控訴人ニ於テ右金
額受取りノ為メ被控訴人方へ出張スルトモ又ハ被控訴人ニ於テ再ヒ控訴人方へ出
向クトモ控訴人ノ沙汰ヲ待ツ旨ヲ書面ニ記シ残置キタルニ其后控訴人ヨリ何等ノ
回報モ無キ次第ナレハ明治十八年四月以後ノ利子ハ難払渡ト云フニ在リ

依テ証拠ヲ審閲シ双方ノ論弁ヲ聴キ説明スル如左

被控訴人ニ於テ甲一号証元利取揃控訴人方へ持参シタリ云々陳述スルト雖トモ唯
口頭ノ陳述ニ止ルヲ以テ之ヲ採用スルヲ得ス依テ被控訴人ハ控訴人カ本訴請求ノ
元利金ノ弁済ヲ拒ムヲ得ス又始審訴訟入費ハ甲一号証ニ関スル控訴人ノ申立相立
チタルモノナレハ控訴人一人ニテ之ヲ負担ス可キモノニアラス

右ノ理由ナルニ依リ判決スル左ノ如シ

下谷区治安裁判所カ明治十八年四月三十日言渡タル裁判ハ其当ヲ得サルニ就キ之
ヲ取消ス依テ被控訴人ハ本訴ノ元利金五拾六円三拾三錢三厘ヲ速ニ控訴人へ完済
ス可ク始審訴訟入費ハ双方各自弁タル可シ

控訴入費ハ被控訴人之ヲ負担ス可シ

明治十八年七月廿一日東京始審裁判所公廷ニ於テ終審ノ裁判ヲ言渡ス者也

東京始審裁判所

判事 藤 林 忠 良[㊞]

判事 児 玉 武 寛[㊞]

書記 橋 本 有 幸

明治 19 年

〔43〕「抵当貸金催促ノ訴訟」(神戸始審裁判所、M19・04・17 判決)

明治 19 年第 48 号

裁判言渡書

兵庫県摂津国神戸区平民貸席業

原告人 松 浦 長兵衛

全県全国全区平民

代言人 加 藤 勝 助

松浦長兵衛方同居平民

被告人 高 橋 キ ク

大阪府西区平民

被告人 高 橋 常 松

右同番地平民

被告人兼右両名代人

高 橋 仁兵衛

兵庫県摂津国神戸区平民

被告人 中 山 勝次郎

右原告人松浦長兵衛ヨリ被告人高橋キク外三名ニ係ル抵当貸金催促ノ訴訟審理ヲ遂ケ原告代言人被告兼代人高橋仁兵衛并ニ被告中山勝次郎ノ陳述ヲ聴クニ原告代言人陳述ノ要旨ハ原告ハ被告ノ一人ナル高橋「キク」カ原告方ヘ娼妓出稼ヲナサントスルニ当リ訴状掲記ノ約定証ヲ受領シ被告共ハ金貳百五十拾円ヲ貸与シタリ而シテ其約定ノ大要ハ貸金ニ成規ノ利子ヲ附シ而シテ被告「キク」娼妓揚代金ノ内半額ヲ「キク」賄料其他諸雜費トシテ原告即チ席主ニ取り残半額中ヨリ娼妓税金取締入費及ヒ臨時取替金ヲ引去リ残額ヲ以テ元利ノ返済ニ充テ又「キク」持參ノ衣類手道具等ハ之ヲ貸金ノ抵当トシ且ツ「キク」止業転席等ノ節ハ借入金并ニ取替金共一時皆済スヘキ約束ナリ然ルニ被告「キク」ハ過般止業セシニ依リ原告ニ於テ貸付金揚代金等ノ計算ヲ遂ルニ滞金貳百四拾円六錢壹厘トナル然レトモ最初訴状ニ誤テ貳百拾九円五拾六錢五厘ヲ請求シタルニ依リ其違算額貳拾円四拾九錢六厘ハ之ヲ除棄シ貳百十九円五十六錢五厘ノミヲ請求ス又右計算ハ原告方ニ控ヘアル帳簿ニ依リタルモノニシテ其帳簿ハ毎月末ニ貸付金諸取替金ト揚代金半額ト差引計算ヲナシ十六年九月ヨリ十七年七月三十一日迄ハ被告「キク」ノ認印ヲ受ケ其後ハ「キク」入院中ニ付認印ヲ受ケサレトモ該帳簿ハ「キク」ニ於テ認メ居ルモノナリ又「キク」ニ於テ花山帳ナルモノヲ造リ玉數ヲ記シ置クモノアリテ原告方ニ預ル「キク」所有ノ筆筒中ニ納メアルニ付被告立会ノ上原告帳簿ト突き合セシニ違算ナカリシヲ以テ之ヲ被告仁兵衛ニ引渡セリ然ルニ被告カ之ヲ公廷ニ呈出スルニ及ヒ其記載スル処原告帳簿ト差異アルヲ発見シタリ是レ全ク被告ノ改造ニ出テタルモノト云フヨリ外ナシ原告ニ於テ其帳簿ヲ認ムルコトヲ得ス且ツ被告ニ於テ最初受取りタル金額ハ貳百五十円ニアラスシテ百五十円ナリト陳述スレトモ原告ニ於テ

ハ被告共ハ貳百五十円ヲ貸与シタルニ相違ナシ又利子ヲ附スルハ不当ナリ税金ハ被告ヨリ納ムヘキモノニアラス其他諸入費トシテ原告ヨリ取替貰ヒタルコトナシト陳述スレトモ原告ハ飽迄契約書及ヒ原告帳簿ニ基キ之ヲ請求ス且ツ「キク」カ原告方ニ残シ置キタル物件中ニハ抵当外ノモノアリト陳述スレトモ「キク」持参ノ物品ハ悉皆抵当ニ充ツヘキコトハ約定書第九条ニ依リテ明カナリト云フニ在リ

被告兼代人高橋仁兵衛陳述ノ要旨ハ被告ハ原告提供スル証書ヲ差入レタルニ相違ナキニ實際被告ノ受領シタル金額ハ百五十円ニシテ残金百円ハ原告ニ於テ「キク」ノ衣類諸道具ヲ調整スルト称シ引去リ渡サ、リシニ依リ原告カ本訴ニ於テ貳百五十円ヲ貸金ノ元トシテ請求スルハ適當ノ請求ナリ又席主ニ於テ娼妓揚代金ノ半額ヲ引去ル以上ハ貸金ニ対シ利子ヲ附セサルヲ福岡町ノ習慣トスルニ原告カ之ヲ顧ミスシテ利子ヲ請求シタルハ不当ナリ且ツ娼妓税金ハ席主ニ於テ弁納スル旨原告ト「キク」トノ間ニ固ク約束シアルニ付之ヲ被告ノ負担ニ帰セシメタルモ不当ナリ又原告帳簿ニ依ルニ玉数惣計六百十九本トアレトモ被告花山帳ハ「キク」ニ於テ日々玉数ヲ記載シタルモノニシテ該花山帳ニ依レハ玉数惣計八百六本ニシテ其金高四百三円半額貳百壹円五十錢ト相成原告訴狀ニ入金貳百壹円五十一錢五厘娼妓稼高ヲ以テ入金ストアルニ畧ホ相合フヲ以テ觀ルモ該花山帳ニ記載スル所口ハ真正ニシテ原告提供スル帳簿ハ「キク」ノ認印アルニ拘ラス全ク信憑スヘカラサルモノナリ又被告ニ於テハ原告ヨリ諸入費ヲ取換貰ヒタルコト一回モ之レナシ右ノ次第ナルニ依リ原被間ノ計算ハ被告カ最初借入レタル百五十円ト揚代金半額貳百壹円五十錢ト差引シ被告方ハ五十壹円五十錢ヲ受取ルヘキモノナリ且ツ「キク」カ原告方ニ残シ置キタル物品中ニハ「キク」固有ノ物品数多アリ是等ハ貸金ノ抵当ニ充テタルモノニアラサルニ付該物品ハ右過剩金五十壹円五十錢ト共ニ被告方ヘ取戻シ度シト云フニ在リ

被告中山勝次郎陳述ノ趣旨ハ自分ハ奉公人口入レヲ業トスル者ニシテ高橋「キク」ヲ原告方ノ娼妓ニ周旋シ其際原告提供スル証書ニ署名捺印シテ差入レタレトモ自分ハ唯周旋シタル迄ニテ貸借ニ関係セサルニ付貸金弁償ノ責メニ任スヘキモノニアラスト思考スト云フニ在リ

依テ各証拠ヲ閲シ説明スル左ノ如シ

被告兼代人高橋仁兵衛ニ於テ原告ヘ差入レタル証書面ニハ貳百五十円トアルモ其実百五十円ノミ受取りタルニ付貳百五十円ヲ貸シタルモノトシテ請求スルハ不当ナリ

ト陳述スレトモ其証拠トシテ見ルヘキモノナキノミナラス被告共カ原告ヨリ借入レタル金員ハ仁兵衛ノ養料及ヒ「キク」ノ衣類手道具類買入代金ニ充ツヘキコトハ契約書第六條ニ記載シアルニ付仮令養料トシテ仁兵衛ノ手ニハ百五十円ノミ受取りタリトスルモ之ヲ以テ借用金額ハ百五十円ノミナリト論結スルヲ得ス從ツテ残百円ノ返済ヲ拒ムコトヲ得サルモノトス又福原町貸席ノ習慣トシテ揚代金ノ半額ヲ引去ル上ハ貸金ニ對シ利子ヲ附スヘカラサルモノナリト陳述スレトモ既ニ被告共承諾ノ上借用証書ニ於テ利子ヲ附スヘキコトヲ約シタル已上ハ今更習慣云々ニ依リ之ヲ取消スコトヲ得サルモノトス又「キク」娼妓税金并ニ貸席取締入費ハ席主ニ於テ弁納スヘキモノニシテ此義ハ席主ト「キク」ノ間ニ於テ固ク約束セリト陳述スレトモ約束シタル証拠ナク現ニ契約書第四條ニ毎月税金并ニ貸席取締入費ハ私（即チ被告）ヨリ出金可致候事トアル已上ハ其中立ヲ採用スルニ由ナシ又「キク」日々ノ稼高ハ「キク」ノ調整シ置キタル花山帳ニ記載シアル所ヲ以テ正當トスヘキモノニシテ原告提供スル帳簿ハ信憑スヘカラサルモノナリト陳述スレトモ花山帳ハ「キク」一個ノ控帳ニシテ原被間ノ証拠トナルヘキモノニアラス而シテ原告提供スル帳簿ハ明治十六年九月ヨリ同十七年七月迄月々計算結ノ処ニ「キク」ノ認印アルヲ以テ見レハ該帳簿ハ原被間ノ証拠トナルヘキモノト認定セサルヲ得ス從フテ該帳簿ニ記載スル玉数税金諸雑費ハ正確ノモノト認定ス然レトモ該帳簿ハ貸金ニ對シ月々一歩五ノ利子即チ成規外ノ利子ヲ附シ計算シタルモノニ付之ヲ成規ノ利子ニ引直シ計算スレハ原告再度ノ改正計算書ノ如ク元利滞金貳百四十円六錢五厘ト相成ル然ルニ原告ノ請求スル所ハ貳百十九円五拾六錢五厘ニシテ請求シ得ヘキ金額ヨリモ少額ナレハ之ヲ指シテ過當ノ請求ナリト云フコトヲ得ス又原告方ニ殘シアル「キク」ノ物品中ニハ抵当外ノモノアリト陳述スレトモ契約書第九條ニ「私衣類手道具ノ義ハ第六條ノ借用金ノ内ヲ以テ買得シタル物品ニ付該金ノ抵当トシテ書入レ置キ候事」トアルニ依リテ觀レハ「キク」カ原告方ニ於テ所持シタル物品ハ悉皆貸金ノ抵当ニ充テタルモノト認定セサルヲ得ス被告中山勝次郎ハ本件貸借ニ關係セサルニ付弁償ノ責ニ任スヘキモノニアラスト思考スト陳述スレトモ既ニ借用証書ニ調印シ其証書ニ「万一連印ノ内差支候者有之節ハ殘ル印形人ヨリ急度皆済可仕」トアル已上ハ原告ニ對シテハ到底弁償ノ責ヲ免カル、コトヲ得サルモノトス右ノ理由ニ依リ判決スル左ノ如シ

被告共ハ速カニ原告請求金貳百十九円五十六錢五厘ヲ弁償スヘシ但シ抵当物品公

売代価ヲ以テ弁納シ尚ホ不足ヲ生スル節ハ別途ニ補償スヘシ

訴訟入費ハ被告共ノ負担タルヘシ

明治十九年四月十七日神戸始審裁判所公廷ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡スモノナリ

判事補 櫻 井 一 久^印

明治 20 年

〔44〕「貸金催促ノ詞訟」(東京始審裁判所、M20・03・11 判決)

明治 20 年第 71 号

裁判言渡書

原告東京府下谷区平民雑業

笹 間 鍵次郎

被告全府本郷区平民貸座敷業

松 本 金 蔵

全 全人妻

松 本 モ ト

右両名代人全区□坂甲吉方全居士族

吉野千万太郎

被告全府全区平民貸座敷業

田 村 千 代

貸金催促ノ詞訟ヲ審理シ原告人被告代人并ニ被告人ノ供述ヲ聴クニ

原告陳述ノ要旨ハ甲号証ノ金高七十円ヲ被告共ヘ貸付壹円ツ、日賦返済ノ約ヲ結
ヒタルニ内六十円ヲ返金セシノミニテ残額滞ルニ依リ本訴ノ元利金員速ニ返済受
度ト云フニ在リ

被告并ニ被告代人答弁ノ要旨ハ本訴ノ金円ハ明治二年中原先舅丹羽仙之助ヨリ借
受タルヲ後ニ原告名義ニ証書書改メタルモノナリ而シテ丹羽仙之助ト被告共ノ間
ニハ特別ノ約定アルニ依リ全人ト対質ノ上事理弁明シタル上ニ非レハ原告ノ請求
ニ応シ難シト云フニ在リ

説明

原告於テ本訴ノ金円ハ最初ヨリ原告カ貸与シタルモノニテ丹羽仙之助ナル者ニ毫

モ関係ナシト申立ルニ依リ全人ヲ召喚審訊スルノ必要アルヲ視ズ殊ニ甲号証ニ対シテハ原告カ認ムル六十円ノ外入金ナキコトハ被告共カ申供スル処ナルニヨリ本訴元利金員ハ被告共ニ於テ返弁ヲ拒ム理由ナキモノトス

判決

被告二名ハ連帯シテ原告要求ノ元金百拾円ニ契約上ノ利子ヲ付シ速ニ完済スベシ訴訟入費ハ被告共之ヲ負担スベシ

明治廿年三月十一日東京始審裁判所公延ニ於テ始審ノ判決ヲ言渡スモノ也

始審裁判所判事 藤 田 隆一郎㊞

裁 判 所 書 記 長谷川 直太郎㊞

明治21年

〔45〕「家屋引払要求ノ訴訟」（仙台始審裁判所、M21・12・15判決）

明治21年第116号

裁判言渡書

原告人宮城県陸前国仙台区平民酒造営業

相 川 作兵衛

代言人全県全區全區平民

抒 窪 廣 成

被告人宮城県陸前国仙台区平民貸座敷営業

桃 井 喜兵衛

代人右同居

桃 井 鶴 代

右相川作兵衛ヨリ桃井喜兵衛ニ対スル家屋引払要求ノ訴訟ヲ審理シ原告代言人被告代人ノ陳述ヲ聴クニ

原告代言人陳述ノ要旨ハ甲第一二号証ノ如ク明治廿一年二月廿九日ニ在テ原告カ所有ニ係ル仙台区常盤町十八番地ノ家屋及建具豊造作家財等悉皆ニテ一ヶ月十七円ノ賃金ヲ以テ被告ヘ貸渡シタル処被告ハ家賃金ヲ延滞スルノミナラズ原告ヘ対シ屢々不当ノ所為アルニ依リ借金証第七条ニ基キ今般之カ引払ヲ請求スト云フニ在リ被告代人答弁ノ要旨ハ明治廿一年二月廿九日ニ在テ原告ヨリ乙第一号証ノ如ク宅

地建家及家財娼妓トモ金三千百円ニテ引受ルノ約定ヲ為シ乙第二号証ノ如ク内金千九百円ヲ相渡シ残金千二百円ハ未タ返済期限至ラサルモノナリ然ルニ若シ原告ニ於テ強テ引払ハシメントナラバ曩ニ渡シタル千九百円ヲ返戻シテ売買ヲ解除スルカ若クハ残金千二百円ヲ被告ヨリ相渡シテ該売買ヲ結了スルカノーニアラサレバ到底原告ノ請求ニ応シ難シト云フニ在リ

依テ各証拠ヲ審閲シ説明スル左ノ如シ

原告ニ於テ甲第一号証ノ借金証ヲ提出シ其第七条ニ基キ被告ニ対シ借舎引払ヲ要求スト雖トモ抑モ出訴ノ借金ハ明治廿一年三月一日ニ在テ被告喜兵衛実父桃井佐兵衛ニ於テ原告ト乙第一号証ノ如ク宅地建家家財等悉皆千二百円ニテ売買ノ契約ヲ為シ而シテ表面佐兵衛ノ名義ナルモ其实喜兵衛ニ於テ乙第二号証ノ如ク娼妓十名女子供一名ニテ千九百円ニテ引受ケ其代金ハ既ニ弁済シタルモ宅地建家ノ代金千二百円ハ明治廿二年六月ヨリ明治廿三年十二月迄ノ間ニ於テ四期ニ弁済シ該金完済シタル後ニアラサレバ乙第一号証第二条ニ基キ地券状書換ヘサルノ約束ナルニ依リ其間貸借ノ名義ト為シ甲第一号証ノ借金証ヲ差入レタル事實ナリトス由之觀是本訴ハ尋常借金ト異ナリ被告ニ於テハ固ヨリ貸座敷營業ヲ為スノ目的ニテ原告ヨリ娼妓迄ヲモ引受ケタルコトナレバ家賃金延滞セリトテ直ニ引払ハシムル如キハ最初契約シタル意思ニ反スルモノト謂ハサルヲ得ス況ンヤ借金証第二条ニ借金年限之儀ハ本年本月ヨリ明治廿三年十二月迄ヲ期トスト明記セルニ於テヤ而シテ其第七条ニ宿料ヲ延滞シ又ハ不当ノ所為ト御認メ相成借舎引払ノ儀御談シ有之節ハ御断ノ当日ヨリ十日以内ニ保証人方ヘ引取り速ニ明渡可申事ト記載アルモ該文詞ノ如キハ通常賃借ニ適用スベキ一般ノ例文タルニ過キスシテ本訴ノ如キ特別ノ場合ニ適用スベキモノニアラズ故ニ原告ハ家賃滞金ヲ請求スルハ格別借舎引払ヲ請求スルヲ得サルモノトス

右ノ理由ニ依リ判決スル左ノ如シ

原告請求不相立

訴訟入費ハ原告ノ負担タルベシ

明治廿一年十二月十五日仙台始審裁判所公廷始審ノ裁判ヲ言渡スモノ也

仙台始審裁判所

判 事 補 井 澤 威[㊞]

裁判所書記 加 藤 鈴 吉[㊞]

[46]「家屋引払要求ノ詞訟」（宮城控訴院、M22・03・22 判決）

明治 21 年第 181 号

裁判言渡書

控訴人宮城県陸前国仙台区平民酒造営業人

相 川 作兵衛

代言人全県全国全区平民

抒 窪 廣 成

被控訴人全県全国全区平民貸座敷営業

桃 井 喜兵衛

代 人全県全国全区士族

仙 石 安 信

参加人全県全国全区

桃 井 佐兵衛

右相川作兵衛ヨリ桃井喜兵衛ニ係ル家屋引払要求ノ詞訟仙台始審裁判所ノ裁判ニ服セス相川作兵衛ヨリ控訴ヲ為シタルニ依リ之ヲ受理シ始審書類ヲモ参照シ控訴代言人被控訴代人参加人ノ陳述ヲ聴クニ其要領左ノ如シ

控訴代言人陳述ノ趣旨ハ本件ハ控訴人ノ所有ナル控訴第一号証ノ物件ヲ一ヶ月金拾七円ノ賃金ヲ以被控訴人ヘ貸与セシ処明治二十一年三月ヨリ同十月ニ至ル此賃金百三拾六円ヲ淹滞セルニ付数回督促ノ末僅カニ三拾七円ヲ受領セシモ残金九拾九円ヲ差入サル而已ナラス控訴第二号証ノ通り曩ニ娼妓等ノ債主権ヲ譲リ渡シタル金八百円ニ対シテモ其義務ヲ尽サ、ルニヨリ止ムヲ得ス該第一号証第七条ニ基キ本訴明渡ヲ請求ニ及ヒシ次第ナリ然ルニ被控訴人於テ本按ノ物件ハ桃井佐兵衛ト売買ノ契約ヲ為シ而シテ被控訴人ハ控訴人ヨリ娼妓等ヲ譲リ受ケ已ニ金千九百円ヲ差入アレハ仮令家賃金ヲ淹滞セリトスルモ直ニ引払ノ請求ヲ受クヘキ道理アラスト主張スレトモ抑家屋売買ノ予約ハ被控訴人ノ関与スル処ニアラス又娼妓ノ債主権ヲ譲リ渡シタルモノ之ヲ以控訴第一号証ノ無効ニ帰スヘキ謂レナシ果シテ然ハ被控訴人カ数月ノ家賃ヲ淹滞セル以上ハ控訴人ノ請求ヲ拒否スヘキ条理ナキヤ頗ル明晰ナリトス而ルヲ原裁判所於テ控訴人曲者ノ裁判ヲ言渡サレタルハ最モ不服ニ付之カ覆審ヲ仰クト云ニ在リ

被控訴人陳述ノ趣旨ハ本件ハ控訴人於テ其第一号証第七条ヲ根拠トシ家屋引払ヒ

ヲ要求ニ及フト雖トモ該借金ハ尋常一般ト異リ頗ル事情ノ在ルアレハ輒ク其需メニ応シ難シ今其事由ヲ掲ケンニ該家屋及ヒ貸座敷営業ニ必用ナル娼妓其他器財ニ至ル迄金三千百円ヲ以売買ノ約ヲ為シ内金壹千九百円ヲ被控訴第三号証ノ如ク相渡シ殘金壹千貳百円ハ被控訴第一号証ノ通り明治二十二年六月ヨリ明治二十三年十二月迄四回ニ払渡スヘキ契約ニテ其期限内ハ家賃ノ名義ヲ以該金ノ利子ヲ払込ヘキ筈ナリ既ニ被控訴人ハ金五百円ヲ費シ別ニ一棟ヲ新築セシ場合ナレハ濫リニ之カ引払ヲ求メラルヘキ理由ナシ曩ニ勸解ヲ出願セラル、ヤ被控訴人ハ該殘金千貳百円ヲ相渡シ該宅地建家ノ売買結了センコトヲ申立当時控訴人於テ一旦之ヲ認諾セシモ其金員授受ノ当日ニ至リ故障ヲ唱ヘ遂ニ本訴ニ至リシ次第ナリ以上ノ事實ナレハ控訴人於テ強テ明渡ヲ求メントスレハ曩ノ売買契約ヲ解除シビニ相渡シタル処ノ千九百円ヲ返戻シ加ルニ新築費用ノ償却法ヲ立ルカ否^(マカ)ラスレハ該売買殘金千貳百円ト及ヒ延滞家賃即チ利子ヲ被控訴人ヨリ償却ノ上売買ヲ結了スルカノ二点ノ内其一ニアラサレハ到底其需メニ応スル能ハサル処ナリ原裁判ハ至当ナルヲ以速ニ之ヲ認可アリタシト云ニ在リ

参加人陳述ノ趣旨ハ本件控訴人カ被控訴人ニ係リ明渡シヲ請求スル処ノ被控訴第一号証ノ物件ハ被控訴人申立ノ如ク参加人於テモ該代金ヲ一時ニ償却シ売買結了センコトヲ求ムト云ニ在リ

仍テ各証拠ヲ審閲シ説明スル左ノ如シ

被控訴第一号証ハ本件所争ノ家宅地売買定約証ニシテ其金額ヲ壹千貳百円ト定メ之ヲ四回ニ分チ明治二十二年六月十二月明治二十三年六月十二月トニ各金三百円宛払込悉皆完済スルノ契約ナリ而シテ控訴第一号証ハ該家屋ノ借舍証ニテ其借期ヲ明治二十三年十二月迄トシ其家賃ヲ一ヶ月金拾七円ト定メ倘シ家賃ヲ延滞スル等ニ於テハ速ニ該家屋ヲ明渡スヘシトノ約定ナリ以上ノ約旨ニ拠レハ該物件タル單一ノ売買予約ニシテ該代金完済スル迄賃貸借ノ契約ナレハ之カ家賃ヲ延滞スルニ於テハ其明渡ヲ請求セラル、モ被控訴人ハ拒ムヘキ条理之ナキモノ、如シト雖トモ抑該物件ノ売買ハ単独ノ成立ニアラスシテ元來貸座敷營業ヲ為スノ目的ヲ以テ該家宅地始メ娼妓等ノ債主權及ヒ貸座敷營業上ニ必用ナル諸物品等ニ至ル迄悉皆金三千百円ニテ売買シ其内千九百円ヲ娼妓等ノ債主權及ヒ物品代価トシ千貳百円ヲ本訴ノ物件代価ト定メタルモノニテ既ニ千九百円ハ被控訴第三号証ノ如ク払入タル次第ナレハ畢竟本訴ノ物件タル娼妓等ノ債主權ト共ニ売買ノ成立セシモノ

ナルモ唯其代価ヲ完済スル迄其名義ノ書換ヲ為サ、ルモノト認メサルヲ得ス何トナレハ被控訴第三号証金千九百円ノ受取証ニ「御譲リ金ノ内也」トアリテ本訴ノ物件ト娼妓等ノ債主権ト同一ノ売買ニ係ルコト明瞭ナレハナリ但控訴人ハ該御譲リ金ノ内トアルヲ以テ初メ千七百円ヲ受取り未タ式百円不足セシヨリスノ如ク記載シ后式百円ヲ受取りシ際千九百円ト改メタルモノニテ其際内ノ一字ヲ塗抹セサリシハ全ク錯誤ナリト云ニアレトモ這ハ信ヲ措ニ足ラサル而巳ナラス之ヲ事実ニ徵スルモ被控訴人等於テ該娼妓始メヲ引受タルモノハ該家宅地ニ在テ之ヲ営業トスル目的ニ出テ殊ニ貸座敷ノ如キ濫リニ他ヘ移転スルヲ得サルモノナレハ即チ全部ノ売買ニシテ全部ニ対シタル内金ノ受取証ト看做サ、ルヲ得ス又控訴人ハ其一号証ト被控訴第一号証ト契約ノ人ヲ異ニスルヲ以テ各々独立ナル契約ナリト主張スレトモ佐兵衛ト喜兵衛トハ父子ノ間柄殊ニ被控訴第三号証ニ佐兵衛一名ヲ記載セシヲ見レハ右兩人ハ共同一致シテ契約セシコト知ルヘシ夫然リ而ラハ本訴ノ物件ヲ単独ノ賃貸トシ彼ノ総テノ売買ト分離シ之カ契約ヲ解キ明渡シヲ請求スルヲ得サルヤ論ヲ俟サルヘシ若夫控訴人主張ノ如ク本訴ノ物件売買トハ自ラ別個ノモノニシテ彼レニ関連スヘキ道理アラスト假定スルモ今也被控訴人参加人等於テ該物件代価金千式百円ト及ビ延滞家賃ヲ一時ニ償却シ該売買ヲ結了セント反求セル以上ハ控訴人ハ之ヲ拒ムヘキ条理ナキモノトス何トナレハ当時双方間ニ於テ本訴ノ物件代価ヲ延期シ明治二十二年二十三年ノ二ケ年内四回ノ払込ト為シタルモノハ畢竟買得者ヲシテ其義務ヲ尽スニ容易ナラシムル便益ヲ与ヘタルモノニテ其払込期限ヲ繰上ケ且全額一時ニ償却セントスル如キハ固ヨリ買与者ニ取り利益トスル処アルモ不利益トスル処アルヲ視サレハナリ然ルニ控訴人ハ該物件タル普通ノ価格ヨリ廉価ニシテ月々ノ家賃ヲ代価ニ見込タルモノナレハ一時ニ償却ヲ受ルハ控訴人カ不利益ナリト主張スレトモ凡物件ヲ売買スルニ於テ其代価ヲ一時ニ授受スルハ一般買与者ノ企望スル所ニシテ其金額ヲ受領スレハ從テ是ヨリ生スル相当ノ利益アリト見做サルヘキモノナレハ別ニ不利益ナリト謂フヲ得サルヘシ倘シ之ヲシテ控訴人申立ノ如キ事情アリトスレハ頗ル異常ノコトナレハ該契約書中特ニ之ヲ明記セサルヲ得サル筋合ナリ何トナレハ凡ソ年賦月賦等ノ弁済ハ債務者ノ利益ニ設定シタル契約ト見做スハ普通ノ法理ナレハナリ到底控訴人ハ其第一号証ヲ以テ単独ナル契約ナリトシ明渡ノ請求ヲ得サルハ勿論被控訴人等カ反求ヲ拒ムヘキ条理之ナキモノトス

以上ノ理由ナルニ依リ判決スル左ノ如シ

明治二十一年十二月十五日仙台始審裁判所於テ被控訴人カ反求ノ抗弁ニ対シ裁判
ヲ与ヘサリシハ其当ヲ得サルニ付之ヲ取消ス仍テ控訴人ハ被控訴人反求ノ通り之
ヲ履行スヘシ

訴訟入費ハ始審終審共各自弁タルヘシ

明治二十二年三月廿二日宮城控訴院公廷ニ於テ終審ノ裁判ヲ言渡スモノナリ

裁判長控訴院評定官	西 渴 訥 [㊞]
陪 席控訴院評定官	犬 飼 巖 磨 [㊞]
陪 席控訴院評定官	町 田 真 秀 [㊞]
裁 判 所 書 記	佐 藤 順 [㊞]

明治 22 年

[47]「貸金催促ノ訴訟」(大津始審裁判所、M22・02・20 判決)

明治 22 年第 2 号

裁判言渡書

原告人滋賀県近江国滋賀郡寄留士族質商

横 井 達次郎

被告人同県同国同郡平民旅舎業

清 水 政次郎

同 京都府山城国下京区藤井ヤマ方全居平民

藤 井 ア イ

藤 井 ヨ ネ

右二名代兼被告人前全所全居平民

藤 井 ウ タ

被告人同府同国同区平民無職業

森 脇 留 一

右原告人横井達次郎ヨリ被告人清水政次郎外四名ニ対スル貸金催促ノ訴訟ヲ審理
シ原被告及被告代兼人ノ陳述ヲ聴クニ

原告陳述ノ要旨ハ明治十八年四月廿八日甲第壹号証ヲ以テ被告人等ヘ金貳百七拾

円貸付ケタル処其期限経過スルニ返済セサルニ付勸解ヲ經由シ本訴ニ及ヒタル次第ナレハ其契約ノ明文ニ基キ日下所在不分明ナル雨森ハナ鍋山田永忠及ヒ既ニ死亡シタル藤井エンヲ除キ他ノ被告五名ヨリ元利速ニ返還受度ト云フニ在リ
被告人ノ内清水政次郎ハ明治二十二年二月十五日マテニ当裁判所ハ出頭ス可ク若シ出頭セサレハ欠席ノマ、裁判ニ及フ可キノ呼出状ノ受取ナカラ期日出頭セス其出頭シタル被告人及被告代兼人答弁ノ要旨ハ本訴原告請求スル金員ハ被告共ニ於テ借用シタルニ相違之レナキヲ以テ其契約ノ趣旨ニ基キ現在スル被告五名ヨリ弁償ス可キモノナルコトハ之ヲ承認スルト雖モ目下金調ナラサルヲ以テ原告請求ニ応スル能ハスト云フニ在リ

仍テ右証拠ヲ審閲シ説明スル左ノ如シ

被告人ノ内清水政次郎ガ明治二十二年二月十五日マテニ出頭ス可ク若シ期日出頭セサレハ欠席ノマ、裁判ニ及フ可キノ呼出状ヲ白ラ受取ナカラ其期日出頭セサルハ白ラ其答弁ノ権利ヲ抛棄シタルモノニテ原告請求ハ悉ク之ヲ認諾セシモノト認定ス又出廷シタル被告人被告代兼人ニ於テ原告請求ヲ承認シ之ニ異議ナキ旨申立ツル以上ハ単ニ金調ノナラサルヲ口実トシ原告請求ヲ拒ム能ハサルハ固ヨリナリト雖モ原告カ請求スル利息ハ明治十六年第六十六号布告ニ違犯スル不当ノ高ナルヲ以テ宜シク同布告ニ遵ヒ之ヲ減殺ス可キモノトス

右ノ理由ニ拠リ判決スル左ノ如シ

被告ノ申立相立タサルヲ以テ被告ハ原告請求ノ元金二年百分ノ十五ノ利子ヲ添付シ速ニ償還シ且訴訟入費ハ被告ニ於テ之ヲ負担ス可キ事

明治二十二年二月廿日大津始審裁判所公廷ニ於テ始審裁判ヲ言渡ス者也

大津始審裁判所

始審裁判所判事 林 靖[㊦]

裁判所書記 遠藤 胤 恵[㊦]

明治23年

〔48〕「物件取戻反訴」（仮処分）（仙台始審裁判所、M23・01・29 判決）

明治23年仮処分第3号

判決書

宮城県陸前国仙台市貸座敷営業舞鶴コマ総理代
人

異議申立人 朴 澤 直 吉

右代言人同市東二番町十二番地士族

草 刈 親 明

右同市平民

対手人 津々良 ツ ネ

右代言人同市元柳町士族

岩 崎 惣十郎

右津々良ツネヨリ舞鶴コマニ係ル物件取戻反訴ニ付キツネノ請求ニ依リ明治廿三年一月廿四日コマニ対シ発シタル仮処分命令ニ対シコマ代言人於テ異議申立ヲナシタルニ依リ双方代言人ノ陳述ヲ聴クニ其要旨如左

異議申立代言人陳述ノ要旨ハ第一本件仮処分命令ヲ以テ申立人ニ対シ其争訟物ノ抵当質入譲渡其他ノ処分ホヲ禁止セラレタル上其命令以外ノ諸件即チ該物品ノ使用保存ホハ申立人ノ権内ナルヘキ筋ナルニ更ニ進ンテ該物件ヲ差押ヘ且之ヲ他人ノ管理ニ属セシムルカ如キハ取モ直サス仮処分ト仮差押トラ混同スルモノニシテ為ス可カラサル処分ナリ第二仮リニ対手人陳述ノ如クナリトスルモ該物件ハ申立人ハ賃金ヲ払ヒ借円セシモノナルニ之ヲ差押フルハ全ク申立人ノ賃借権ヲ妨害スルモノニシテ為メニ約定ノ賃金ヲモ払フ能ハサルニ至ルヘキカ故ニ決シテ差押ヲナシ得ヘキニアラス第三仮リニ差押ヘ得ヘキモノトスルモ該物品中ニハ申立人カ日常生活上ニ欠ク可カラサル物品及ヒ営業上ノ必要品ホ混同シ居ルヲ以テ其生活上ノ必要品及ヒ営業上ノ必要品ノ価格五十円ニテハ当然差押中ヨリ取除ク可キ筋ナリ依テ仮処分命令ニ因リ執行セラル可キ該物品差押ノ一部分ハ取消相成度ト云フニ在リ対手代言人陳述ノ要旨ハ本件所争ノ物品ハ固ト対手人ノ所有物トシテ申立人ハ賃貸ヲ為シ置タルニ申立人於テ契約ニ背キ已ニ二ヶ月有余ノ賃金ヲ滞リタル上ハ約定ニ基キ直チニ該物品ヲ取戻ス可キ権利ノ生セシモノナルカ故ニ申立人ヲシテ他ヘ売買譲与質入上ノ行為ヲナサ、ラシメンカ為メ之レカ差押ヲナスハ当然ノ処置ナリ又生活及ヒ営業上ノ必要品ヲ差除クヘキ規則ハ金錢上ノ権利ノ為メ義務者ノ所有財産ヲ差押ヘ若クハ義務者身代限処分上ノ場合ハ權利本件賃貸物ホニ適用スヘキ筋ニアラス依テ仮処分ニ基ク差押手續ハ取消スヘキ理由ナシト云フニ在リ

依テ証拠ヲ審閲シ説明スル如左

第一条 仮処分トハ金銭若クハ金銭ニ換フルヲ得サル特定ノ係争物上ニ施ス所ノ処分ナリ而シテ其処分ハ裁判所ニ於テ其意見ニ從ヒ權利ノ目的ヲ達スルニ必要ナリトスル諸件ハ之ヲ為スヲ得ヘキモノトス抑モ仮処分命令上ニ記スル所ノ諸件ハ単ニ申立人カ自己ノ随意ニ為スコトヲ禁止シタルモノニシテ其文中所轄地ヘ移転シコトハ申立人ノ随意ヲ以テ他人ヘ預ケ若クハ貸渡シ又ハ隠蔽スルホノ事ニ限り裁判上ノ処分ヲ以テ第三者ニ管理セシムルカ如キコトヲモ包含シタルニ非ラス而シテ申立人ニ対シテハ該命令ノミヲ以テ足ル可シト雖モ該命令ノ目的ヲ完全ニ達セントスルニハ須ラク第三者ニ対シテ有効ナルノ手續ヲ施サ、ル可カラス今ヤ動産上第三者ニ対シ有効ナルノ所為ハ其物件ヲ他人ノ占有即チ管理ニ委ヌルノ外ナシトス何トナレハ若シ申立人カ仮処分ノ命令ニ背キ其目的物ヲ善意ナル第三者ニ売却譲与其他ノ処分ヲ為シ其管理ヲ引渡スカ如キコトアラハ縱令申立人ハ之レカ為メ刑事上ノ処分ヲ受クルコトアルモ対手人ハ終ニ善意ナル第三者ニ対シ其物品ヲ取戻スコト能ハサルカ如キ危険アレハナリ故ニ本件ノ場合ニ於テ仮処分ノ目的物ヲ第三者ノ管理ニ委ヌルハ必要ニシテ譬ヘハ猶ホ不動産仮処分ノ場合ニ於テ単ニ命令書ニ行為ノ禁止条件ノミヲ記載シ其命令書ヲ登記簿ニ記入スルト其効力ヲ同フスルモノトス之ヲ要スルニ本件仮処分ノ目的物ヲ第三者ノ保管セシムルハ其命令ノ執行上必然生スヘキ結果ニシテ其差押ハ畢竟第三者ニ保管セシムル為メノ手續ニ外ナラサルカ故ニ縱令命令書中其手續結果ヲ記載セサルモ当然執行ス可キモノニシテ決シテ單純ノ仮差押ト混同シタルモノニアラストス

第二条 本件物品ノ抵当ナリヤ否ヤハ本年始審第六号訴訟ノ目的ナルヲ以テ爰ニ之ヲ判示スルヲ得スト雖モ該訴件乙第二号乙第四号甲第二号甲第五号証ホニ拠レハ表面上該物品ハ対手人ノ所有ニシテ申立人ハ賃借人ナルノミナラス其借賃モ亦数日間掩滞シタルコト明瞭ナリ已ニ然リトセハ該乙第四号証ノ約ニ基キ対手人於テ其物品ノ引渡ヲ求ムルヲ得ヘクシテ申立人ハ強テ拒ムヲ得サル筋ナルカ故ニ対手人カ該物品ヲ差押タリトテ之ヲ以テ賃借權ノ妨害ヲナシタリト謂フヲ得ス況ンヤ乙第六号証ニ拠レハ其差押ノコトハ已ニ申立人ノ承諾シタル事柄ナルニ於テヤ又況ンヤ申立人自供ノ如ク抵当物ナリトスルモ其自ラ弁償ノ義務ヲ怠ル場合ニ於テハ之レカ差押ヲナシ得ヘキ条理ナルニ於テヤ

第三条 本件仮処分物品中申立人ノ生活上ニ於ケル必要品及ヒ価格五十円マテノ

営業必要品ハ当然差押中ヨリ取除クヘキ筋ナリト云フモ此申立代言人ノ主張ハ採用スルヲ得ス何トナレハ如此物品ヲ差押フ可カラサルノ規定ハ単リ金銭上ノ負債弁償ニ充ツル為メ義務者ノ所有財産ヲ差押フル場合ニノミ適用スヘクシテ本件ノ如ク対手人カ自己ノ所有物ナリトシテ争フ所ノ目的物ノ仮処分ノ場合ニ適用スキニアラサレハナリ

右ノ理由ナルニ依リ判決スル如左

異議申立人於テ本件仮処分ニ基ク所ノ差押手續ノ一部分ヲ取消サシメントスル申立不相立依テ之ヲ棄却ス

然レトモ甲第二号証上ニ拠レハ該件ハ結局損害賠償ヲ以テ填補スルヲ得ヘキ情況アルト且申立人ノ営業上ニ生スヘキ危害トヲ斟酌シ申立人於テ保証金四百円若クハ之ニ相当ノ価格アル公債証書ヲ保証トシテ当裁判所ニ附托スルニ於テ該仮処分ノ取消ヲ求ムルコトヲ允許ス

本件費用ハ申立人之ヲ負担ス可シ

明治二十三年一月二十九日仙台始審裁判所於テ初審判決ヲ言渡ス

仙台始審裁判所

始審裁判所判事 五十嵐 佐備[㊤]

裁 判 所 書 記 池 田 敬[㊤]

〔49〕「貸金請求事件」（名古屋治安裁判所、M23・03・13 判決）

明治 23 年第 61 号

裁判言渡書

原告人愛知県名古屋市土族

安 倍 義 久

被告人同県名古屋市平民

横 山 鉄 蔵

被告人同県同市高田金七方附籍娼妓

横 山 ふ み

右安倍義久ヨリ横山鉄蔵等ニ係ル貸金請求事件ヲ審理スルニ原告ハ明治廿二年九月中金拾円ヲ被告等ニ貸渡シタル処弁済遅延シタルニ依リ利息五拾銭ヲ併セ之ヲ請求スト云ヒ被告鉄蔵ハ右金員ヲ實際使用シタルモノハふみなレハ同人稼金ノ内

ヨリ弁済シタシト云ヒ被告ふみハ明治廿二年十二月三日原告ニ弁済スヘキ為メ鉄蔵ニ他ノ金額ト取束ネ金七拾円ヲ渡シタレハ今更本件ノ請求ヲ受クヘキ筈ナシト云フニ在リ

依テ説明及判決ヲ為ス左ノ如シ

被告鉄蔵カふみ稼金ヲ以テ弁済シタシト云フハ情願ニ止マリ被告ふみカ鉄蔵ニ金員ヲ渡シタリト云フモ原告ニ渡シタルニアラサレハ何レモ原告ノ請求ヲ拒ム理由ト為スヲ得ス

依テ被告等ハ連帯シテ金拾円五拾錢ヲ原告ニ弁済スヘシ

訴訟入費ハ被告等之ヲ負担スヘシ

明治廿三年三月十三日名古屋治安裁判所公延ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡スモノナリ

名古屋治安裁判所

判事 試補 吉 澤 謙 吉[㊟]

裁判所書記 中 根 正 雄[㊟]

[50]「貸金請求ノ訴訟」（名古屋始審裁判所、M23・04・11 判決）

明治23年第35号

裁判言渡書

原告人愛知県名古屋市平民

角 田 福治郎

右后見人同県同市平民

角 田 市次郎

原告代言人同県同市平民

依 田 菊太郎

被告人岐阜県厚見郡平民愛知県名古屋市日比野コト方止宿

白 木 タ カ

被告人兼総代人岐阜県厚見郡平民右日比野コト方止宿

白 木 嘉 七

右原告人ヨリ被告人共ニ対スル貸金請求ノ訴訟ヲ審理スルニ

原告代言人陳述ノ要旨ハ被告人共ヨリ甲第壹号証乃至甲第六号証ヲ受領シ金員ヲ貸与シタル処被告白木タカハ甲号各証ノ契約アルニモ拘ハラズ擅ニ芸妓廃業ヲナシタルニヨリ屢々約定履行ノ談判ヲ遂ゲタル末甲第貳貳号証ノ契約ニ基キ貸金請求ノ勸解ヲ經由シ本訴ニ及ビタル次第ナリ然ルニ被告人共ハ資力ニ乏シキヲ以テ其自認スル金百貳拾七円拾參錢五厘ノ返済ヲ受ケ余ハ見捨勘弁セント曰ヒ被告総代人答弁ノ要領ハ原告人ノ請求ニ係ル金百四拾円六拾四錢貳厘ノ精算ハ不当ニシテ被告人共ノ自認スル金百貳拾七円拾參錢五厘ノ外毫モ返済義務無キヲ以テ見捨勘弁ヲ受クル理由無シト曰フニアリ

依テ各証拠ヲ審閲シ説明スルニ本訴請求ニ係ル金百四拾円六拾四錢貳厘ノ内被告人ハ百貳拾七円拾參錢五厘ノ返済義務ヲ認メ原告人ハ被告人ノ自認スル金額ノ返済ヲ受ケ其余ハ見捨勘弁セント曰フ以上ハ最早互ニ争フノ必要無キモノトス右ノ理由ニ依リ被告人ハ其自認スル金百貳拾七円拾參錢五厘ヲ速ニ返済ス可シ但訴訟入費ハ各自弁タル可シ

明治廿三年四月十一日名古屋始審裁判所公廷ニ於テ始審ノ裁判ヲ言渡スモノ也

判事 試補 河 原 栄次郎㊞

裁判所書記 稲 生 正 政㊞

[51]「抗告棄却決定」(名古屋控訴院、M23・05・21 決定)

明治 23 年抗告第 9 号

院長 大塚㊞

裁判長 中田㊞

専理裁判官 由布㊞

陪席裁判官 百地㊞

判定書

抗告人愛知県尾張国当時全県名古屋市松岡長三郎
方寄留平民娼妓業

鈴 木 な ぎ

外壱名

本抗告ノ旨趣タル名古屋始審裁判所カ抗告人ヨリ明治二十三年五月九日付ヲ以テ差出シタル本件附属ノ歎願書ヲ排斥シタルハ不当ナリト云フニアレトモ該抗告ハ

条理上許スヘキモノニ非サルヲ以テ棄却スルモノナリ

明治二十三年五月二十一日

名古屋控訴院会議局

民事局長心得

控訴院評定官 中 田 憲 信[㊞]

控訴院評定官 由 布 武三郎[㊞]

控訴院評定官代理

始審裁判所判事 百 地 宅 憲[㊞]

[52]「貸金催促ノ訴訟」（秋田始審裁判所、M23・06・13 判決）

明治 23 年第 39 号

裁判言渡書

原告秋田県羽後国秋田市堀江国彦後見人全市土族

菅 原 牧之助

被告全県全国全市

大 福 吉 藏

被告全県全国全市

三 浦 ト ヌ

右両名代人全県全国全市土族

藤 田 繁 治

被告全県全国全市土族

斎 藤 米之助

右堀江国彦後見人菅原牧之助ヨリ大福吉藏外二名ニ係ル貸金催促ノ訴訟ヲ審理シ
原被双方ノ陳述ヲ聴クニ

原告陳述ノ要旨ハ被後見人国彦先代堀江利和ニ於テ原告貸金証書ノ如ク明治二十二年一月中被告三名ヘ金百五十円貸与ヘ全年十月限返済スヘキ約定ノ処期限ヲ經過スルモ返弁セサルニ付元金百五十円ニ貸付年月ヨリ本年五月迄十七ヶ月分ノ制限利子金三十一円八十七錢五厘ヲ加ヘタル元利合金百八十一円八十七錢五厘ノ内明治二十二年二月ヨリ本年三月迄数ケ度ニ受取りタル金三十一円ニ各其翌月ヨリ本年五月迄ノ利子金三年一錢ヲ加ヘタル合金三十四円一錢ヲ控除シ殘金百四十七円八十

六錢五厘速ニ被告共ヨリ連帯返償スヘキ様裁判アランコトヲ請求スト云フニアリ
 被告大福吉蔵三浦トメ代人答弁ノ要旨ハ原告提出シタル証書ノ如ク当時金百五十
 円ヲ借入レタルニ相違ナキモ右ハ被告等カ貸座敷營業上ニ仕入ヲ受ケタル金員ニ
 シテ普通通貨借ト其性質ヲ異ニセルコト証書文詞中「毎月入金之内諸雜費支払余金ノ
 義ハ預リ申候云々」又別紙約定証ヲ差入レアルニ徴シテ明カナリ故ニ營業上盛衰ノ
 都合ニ依リ被告等ハ漸次返済ノ義務ヲ尽スヘキハ勿論ナリト雖モ目下一時ノ請求
 ニ応スル能ハスト云フニアリ

被告斎藤米之助答弁ノ要旨ハ原告提出ノ証書ハ被告カ連借主トナリ当時差入レタ
 ルニ相違ナキモ右金ハ其實被告ノ使用シタルモノニアラスシテ外被告兩名カ營業
 仕入金トシテ被告ノ周旋ヲ以テ貸与セシメタルモノニテ然ルニ被告モ亦連借主ノ
 一人トナリタルハ当時債主ノ依頼ニ依リ不得止記名シタルモノナルヲ以テ其請求
 ニ応シ難シト云フニアリ

依テ証拠ヲ審閲シ説明スル如左

被告代人ニ於テ原告ヘ差入レアリトスル約定証ハ若シ返弁方延滞ノ節ハ被告米之
 助ヲ督促人ニ附ケ置キ日々ノ上リ高ヨリ諸雜費ヲ支払ヒタル殘金ヲ引上クル等ノ
 約定ナリト陳述スレトモ右ハ口頭無証ノ陳述ニ過キス依リニ該約定アリトスルニ
 之ヲ以テ抗弁ノ理由トスルニ足ラス何トナレハ該約定及ヒ証書文詞中「毎月入金ノ
 内諸雜費支払余金ノ義ハ預リ申候云々」ノ文詞ハ債主ニ於テ返済ノ担保トシテ設ケ
 タルモノニ外ナラサレハナリ然リ而シテ当初ノ義務ヲ認メ居ル以上ハ其抗弁採用
 スルニ由ナシ

又被告斎藤米之助ニ於テハ該金円ハ實際自己ノ使用シタルモノニアラスシテ当時
 債主ノ依頼ニ依リ連借人トナリタルニ過キスト陳述スレトモ已ニ連借人タルコト
 ヲ承諾シタル以上ハ當時外被告ト共ニ弁論ノ義務ヲ負擔シタルコト明了ナルヲ以
 テ其抗弁亦採用シ難シ

依テ被告等ハ原告ニ對シ連帯弁償ノ義務ヲ免レサルモノトス

右ノ理由ナルニ依リ判決スル如左

原告請求ノ貸金元利合計百四十七円八十六錢五厘ハ被告共ニ於テ速ニ連帯弁償ス
 可シ

訴訟入費ハ被告等ノ連帯負擔タル可シ

明治二十三年六月十三日於秋田始審裁判所公廷始審ノ裁判ヲ言渡ス

始審裁判所判事 石 井 冠八郎[㊟]
裁 判 所 書 記 岸 武太郎[㊟]

[53]「抵当屋敷其他ノ物件受戻事件」（宮城控訴院、M23・06・23 判決）

明治 23 年第 52 号

裁判言渡書

控訴人宮城県陸前国仙台市平民無職業

津々良 ツ ネ

右代言人同県同国同市元柳町四拾壹番地主族

岩 崎 惣十郎

被控訴人同県同国同市平民貸座敷営業舞鶴コマ総
理代人

朴 澤 直 吉

右代言人同県同国同市東二番町拾二番地主族

草 刈 親 明

右舞鶴コマヨリ津々良ツネニ係ル抵当屋敷其他ノ物件受戻事件ニ付仙台始審裁判所カ言渡シタル裁判ニ服セス津々良ツネヨリ控訴ヲ為シタルニ依リ之ヲ受理シ更ニ双方ノ陳述ヲ聴クニ控訴ノ要領ハ左ノ如シ

明治廿三年二月廿三日仙台始審裁判所於テ控訴人ノ借舎立払動産返戻ノ反求ヲ排斥シ被控訴人ノ請求ヲ採用シタルハ不当ト思量スルニ付更ニ控訴人ノ反求相立様裁判請度（以上一定ノ中立）而シテ本訴ノ事実ニ於ケル被控訴人カ控訴人ニ対シ請戻ヲ請求スル動産不動産ハ控訴第一号証乃至第三号証ノ如ク被控訴人ヨリ之ヲ買請ケ更ニ戻証ヲ被控訴人ニ交付シ控訴第四号証ノ如ク五ヶ条ノ特約ヲ為シ其俣被控訴人ニ貸与ヘ置タルモノニ有之控訴第四号証第二項ニ「右御借請使用中一ヶ月タリトモ前記ノ送金ニ滞リ候節ハ該家物件ヲ直チニ御引上ケ拙者ハ明渡し立退可中其時拙者ニ於テ一言ノ異議申間敷事」トアルニ拘ハラヌ被控訴人ハ明治廿二年六月中旬ヨリ甲第五号証明記ノ如ク日々淹滞セサルナリ殊ニ同年九月十五日ヨリ同月三十日迄ハ引継キ淹滞ニ付無止同日控訴第五号証ノ金七拾五円ノ借用証書ヲ受領シタリ其后同年十月五日ヨリ二ヶ月半余更ニ入金ナキヲ以テ屢督促ニ及ヒタルニ却テ不法ノミ申張り到底埒明カサルニ付同年十二月十八日控訴第四号証第二項ノ

明文ニ基キ貸与ノ物件返戻及ヒ借舎立払ノ勧解ヲ出願シタル処控訴人ハ直頭又ハ
 代言人佐藤運宜ヲ以申込ノ筋アルニ依リ其懇請ヲ許容シ先以テ控訴第五号証ノ金
 七拾五円ヲ返戻スヘク且第四号証ノ物件借用証ハ更ニ公証人ニ認メサセ差入ルヘ
 シト相答ヒタルニ被控訴人ハ運宜ト共ニ之ヲ承引シテ金五拾円ト貳拾五円ト都合
 金七拾五円ヲ持參シ物件ノ新規借用証ハ本年一月三日迄猶予ヲ乞フニ依リ是亦許
 容シタルニ同月五日ニ至リテモ其手續ヲ履行セス同日控訴第六号証ノ定約証ヲ受
 領シテ翌六日ニハ屹度該借用証ヲ差入ル、コトヲ約シタルニ同日モ猶其約ヲ履マ
 サルノミナラス同月十三日ニ至ルモ之ヲ履行セサルハ不審ナリト愚考セシヲ以テ
 内ニ実地ヲ探リ見ルニ貸与シタル物件中ノ一部ヲ更ニ公証人中嶋謙藏ノ手ヲ經テ
 市内新傳馬町伊藤溶齋方ニ抵当トシテ金員ヲ借用シタル事實ヲ発見シタルニ付一
 方ニハ控訴第六号証ノ約旨ニ基キ一時猶予ヲ与ヘタル財産差押ノ手續ニ再ヒ着手
 シ又一方ニハ右違約ノ廉ヲ示談人運宜ニ中送リタルニ同人モ再度被控訴人ニ其不
 当ヲ責メタル由ナレトモ彼は遁辭ヲ構フルノミニテ更ニ埒明カサル処被控訴人ハ
 不当ニモ代言人草刈親明ヲシテ自己ノ違約ヲ指置キ却テ突然本訴ヲ提起スルニ至
 レリ是ニ於テ控訴人モ亦已ヲ得ス之ヲ附帶シテ勧解ト同一ナル反求ヲ為タルモノ
 ナリ（以上ノ本訴ノ事實ナリ）右ノ如キ事實ナルニモ拘ハラス原裁判所於テ控訴人
 曲者ノ裁判ヲ言渡シタル理由ヲ約言スレハ本案ノ売買タル表面上ノ仮装ニシテ控
 訴人ハ該物件ヲ真ニ自己ノ所有トスルノ意思ナシ已ニ然レハ該物件タル抵償物タ
 ルニ過キサルヲ以テ仮令被控訴人カ約定ノ期限間其返金ヲ怠レハトテ該物件返戻
 ヲ要ムル權利ナキハ明治六年第三百六号布告地所質入書入規則及ヒ之ニ関スル達
 ニ依リ明瞭ナリトノ意ニ外ナラス蓋シ原裁判ハ第一本按ノ事實ヲ誤認シ第二布告
 ノ精神ヲ誤解シ第三契約自由ノ原則ヲ蔑如シタル不当ノ裁判ナリ控訴第一・二・三・四
 号証ニ依レハ係争物件ハ合意上正当ニ売買シテ之ヲ更ニ被控訴人ニ貸与シタルコ
 トハ一点ノ疑フヘキ処ナシ然ルニ原裁判所ハ甲第一号証ニ依レハ元來貸金ノ性質
 アリト云フト雖トモ該証アレハ何故ニ貸与タルヘキ欤抑モ該一号証タルヤ控訴人
 於テ十九ヶ月目ニ之ヲ無代価ニテ被控訴人ニ譲与スルニハ如何ナル計算ヲ以テセ
 バ損害ナカルヘキカノ予算ヲ為シタル記應書ニシテ而シテ其標準ハ世間普通ノ利
 子ヲ以テセシニ外ナラス此標準ヲ利子ヲ以テ為セシトテ何カ為メニ貸金ナリト見
 做スヘキカ被控訴人ニ違約ナリシハ当然此利益ヲ獲得シ倘シ違約スレハ控訴第四
 号証ノ第二項ニ從フヘキハ未必条件ニ関スル契約ノ本色ナリ被控訴人カ曾テ之ヲ

認諾シ而シテ猶之ヲ違約セシカ則チ未必条件ノ到来セシナリ復何ソ之ヲ執行スルニ躊躇スルヲ要センヤト云ニアリ

被控訴人答弁ノ要領ハ抑モ本件ハ左ノ三項ヲ審究スルヲ要ス

第一本訴ノ物件ハ抵当ナリヤ將タ売買ナリヤ

第二仮リニ売買ニシテ且ツ控訴人云フカ如キ特約アルモノナリトセハ被控訴人ハ既ニ其買戻ノ權利ヲ失却シタリヤ即チ違約者ハ被控訴人ニアリヤ否ノコト

第三仮リニ被控訴人ハ其違約者ナリトスルモ控訴人ヨリ勧解出願ノ上財産差押セラレタル際金七拾五円ヲ差入レ示談ヲ為シタルハ未タ以テ其買戻ノ權利ヲ恢復シタルモノト為シ得サルヤ否ノコト

第一本訴物件ノ内不動産ハ細谷徳治ヨリ齊藤利実ニ移転シ利実ヨリ佐藤文之進ニ移転シ文之進ヨリ再ヒ徳治ニ移転シ徳治ヨリ更ニ控訴人へ移転シタル場合総テ地券名前主ヲ以テ其売主トナシタルモ其實金員ノ取引ハ皆買入ト被控訴人トノ間ニ受授シタルコト又動産ハ何レヨリ何レニ移転スルモ悉ク被控訴人売主トナリ居ルコト即チ控訴人カ不動産ノ買得金ト称スルモノヲ被控訴人ニ渡シタルコト動産ハ徳治ヨリ売得シタル事実ナリト云フニ拘ハラス控訴人ノ名ヲ以テ売買シタルコト尚本訴ノ物件ハ被控訴人カ当初徳治ニ売リタル時ヨリ徳治カ控訴人ニ売ルマテ其売買証書ニ於ケル不動産ニ付テハ総テ被控訴人ノ連署アルコト動産及娼妓ニ付テハ総テ被控訴人ノ売人タル名目アルコト進ンテ控訴人ハ本訴物件ノ引渡ヲ受ケサルコト売買スヘカ〔ラ〕サル娼妓ノ売買シアルコト又其娼妓ハ依然被控訴人方ニ在テ營業シ其取得金ハ皆被控訴人ニ對スル借金ニ充テ返弁シツ、アルコト及被控訴第一号証ニ依レハ控訴人カ被控訴人ニ對シ本訴ノ金員ヲ受授スル場合其基金タル貳千五百円ニ利子ヲ加ヘ之ヲ二千八百円ト為シ且ツ其利子ノ計算返弁ノ方法ヲ定メ之ヲ被控訴人ニ示シタル事実ノ如キハ尤其売買ナラスシテ貸借ナルコトヲ証スヘキモノナリ若シ売買ナラハ控訴人ハ徳治ヨリ買得シタルモノナルヲ以テ被控訴第一号証ノ如ク其元利計算書ヲ被控訴人ニ差出スヘキ道理ナシ宜シク徳治ニ与フヘキモノナリ況ヤ該物件ハ僅ニ金貳千五百円ナルニ前利トシテ金參百円ヲ加ヘ証券ト為シタルカ如キ一日金五円ツ、十九ヶ月間差入ル、ハ無代価ニテ該物件ヲ返戻スルト云ヘル如キ二千五百円ノ物件ニ對シ一日金五円ヲ損料トスルハ甚タ權衡相合ハサル如キ其他數多ノ事実ニ依レハ本訴物件ノ売買ニ非ス抵当ナルコト甚タ明確ナリ控訴人ハ文字ノ外ニ証書ヲ解釈スルヲ以テ不可トスルモノ、如クナレト

モ契約ハ事実ニ依ルヘキヲ本旨トスレハ其申立ハ不相立

第二仮リニ該物品ハ真正ノ売買ナリトスルモ被控訴人ハ未タ曾テ其契約ニ違背セサルカ故ニ其買戻ノ権利ヲ失却セス若シ夫レ被控訴人ヲシテ違約者ナラシメン坎其証拠トシテ控訴人カ損害金ヲ催促シタル証拠ヲ挙げサルヘカラス其返期ニ返済セサルカ如キヲ以テ直チニ違約者ナリトスルヲ得ス現ニ被控訴人ハ明治廿二年六月ニ於テ返金セサル事アル際其権利ヲ奪ハレサルハ其確証ナリ取モ直サス淹滞ノ責ハ権利者ノ催促ニ依テ初メテ生スルトノ元則ニ基キシモノナリ本訴契約ノ旨趣モ亦此ニ在リ

第三又仮リニ被控訴人ヲ以テ違約者ナリトスルモ被控訴人ハ控訴人ヨリ本訴物件取戻等ノ勧解出願セラレタル際被控訴第四号証ノ如ク金七拾五円ヲ差入レ之カ濟口ヲ為シタルニ付違約ノ責ハ共ニ消滅シ更ニ該物件受戻ノ権利ヲ恢復シタルモノナリ然ルニ控訴人ハ被控訴第四号証ヲ以テ控訴第五号証ノ金員ナリト申立ツレトモ控訴第七号証ニ依レハ岩崎惣一郎ハ其権利ナシ而シテ被控訴第四号ノ但書ニ借舎取払物件取戻事件ニ付済方金ノ内ナリト之レアリテ被控訴第五号証ノ金員ナラサルコト甚タ明ナリ況ヤ果シテ控訴人申立ノ如クナラハ控訴第五六号証ハ疾クニ被控訴人ヘ返戻セサルヘカラサルモノナルオヤ

以上ノ事実理由ナレハ原裁判尤モ至当ト確信ス依テ速カニ認可セラレ控訴人ノ反求排斥セラレンコトヲ乞フト云フニアリ

依テ各証書ヲ審閲シ双方代言人ノ弁論ヲ聴クニ本按ハ左ノ二項ヲ審明スルヲ以テ必要ナリトス

一控訴第一号乃至三号証ハ地所建物其他ノ物件売買ノ契約ナリヤ將タ其名ハ売買ナリト雖トモ其實該証記載ノ物件ヲ抵当ト為シタル金員ノ貸借ニ過キサルモノナルヤ否ヤ

二被控訴第二号証無代価譲渡ノ約定ハ既ニ取消サレ該証ハ全ク無効ニ帰シタルモノナルヤ將タ被控訴人ハ今尚ホ該証ニ依リ前項売買ノ物件受戻ノ権能ヲ有スルヤ否ヤ

第一控訴第一号証ハ地所建物売渡証書ニシテ登記ヲ經タルモノナリ同第二号証ハ家具売切証書ナリ同第三号証ハ証券譲渡証書ニシテ二業取締人ノ認証有之何レモ売買又ハ譲渡ノ契約証書ニシテ金員貸借ノ文詞アルコトナシ且控訴第四号証ノ如ク右地所建物及物品使用貸借ノ契約アルヲ見レハ前頭第一二三号証ノ売買契約ナ

ルコト益明瞭ナルヘシ何トナレハ右諸証カ果シテ金員ノ貸借ニシテ右地所建物其他ノ物件カ果シテ其抵当ニ供シタル事実ニ過キサレハ該物件ニ付使用貸借ノ成立ヘキ理由アラサレハナリ而シテ控訴第四号証及ヒ被控訴第二号証ヲ参照スレハ該物件ノ買得代価元利ニ相当スル金額ヲ十九ヶ月間日割ヲ以テ控訴人ニ償却スル時ハ無代価ニテ被控訴人ニ譲渡スヘキ条件ヲ付シタルモノニシテ則チ被控訴人ハ受戻権能ヲ有スル売買ナリトス故ニ被控訴人ニシテ其権能ヲ行ハント欲セハ必スヤ契約ノ期間ニ於テ契約ノ金額ヲ提供シ以テ其目的ヲ達スヘキコト勿論ナリ

但被控訴人ハ其第一号証ニ元利ノ計算アルヲ以テ控訴第一二三号証ノ契約ハ其実貸借ナリトスル証拠ニ供スト雖トモ控訴人於テ是レ只受戻金額ヲ算出シタル標準ニ過キササル旨ノ弁解モ有之抑受戻金額ナルモノハ売買代価ノ元利金ニ基キ計算ヲ立ルハ普通行ハル、方法ナレハ此計算書アルノミヲ以テ右一二三号証ノ契約ハ即チ金員ノ貸借ナリトスル証拠トハ為シカタシ又被控訴人ハ本訴物件ノ内不動産ハ細谷徳治ヨリ齊藤利実ニ利実ヨリ佐藤文之進ニ文之進ヨリ再ヒ徳治ニ徳治ヨリ更ラニ控訴人ニ移転シタル場合總テ地券名前主ヲ以テ其売主ト為シタルモ其実金員ハ皆買人ト被控訴人トノ間ニ受授シタルコト或ハ控訴人ニ於テ売買ノ物件引渡ヲ受ケサルコト或ハ売買スヘカラサル娼妓ヲ売買シタルコト及其娼妓ハ被控訴人方ニ営業シ其取得金ハ被控訴人ニ対スル借金ニ充テ返済シツ、アル等ノ事ヲ以テ売買ニアラサル証左ニ供スト雖トモ従前受度条件付ノ売買ニシテ一方ハ前買主ヨリ受戻シー一方ハ新買主ニ売渡スニ付事ノ便宜ヲ謀リ前買主ヨリ直チニ新買主ニ売渡シ証書ヲ作ルカ如キ民間ニ有之事柄ナレハ敢テ怪シムニ足ラス又控訴第四号証使用貸借ノ成立アルヲ見レハ当時既ニ即時ノ引渡アリタルコト知ルヘク又控訴第三号証ハ債権ノ譲渡ニシテ娼妓ノ売買ト謂フヘキモノニアラス而シテ其譲渡代金モ亦受戻金額日割ノ中ニ包含シタル計算ナレハ其取得金ヲ被控訴人カ取立ツルコト素ヨリ妨ケナカルヘシ要スルニ控訴第一二三号証ハ売買ノ契約ニアラスシテ金員ノ貸借ナリト認定スヘキ確証一モアルコトナシトス第二控訴人ノ申立ヲ以テ被控訴第五号証ニ照ス時ハ被控訴人ハ控訴第四号証及被控訴第二号証ノ約旨ニ違背シー一月以上送金ヲ滞リタルコト明瞭ナレハ控訴第四号証ノ契約第二項ノ制裁ヲ受クヘキモノ、如シト雖トモ控訴人ハ既ニ右四号証第二項執行ノ為メ勧解出願ニ及ヒ被控訴第四号証ノ如ク該事件済方金トシテ五拾円外ニ金貳拾五円ヲ受取り（仮令控訴第五号証ノ金員ナリトスルモ）尚ホ控訴第六号証

ノ如ク本年一月六日迄右執行ノ猶予ヲ与ヘタルモノナレハ此時ニ當リ受戻ノ合意ハ双方間有効ニ存在シアリシコト疑ヒナシ然ルニ被控訴人於テ前一日則本年一月五日受戻金員調達ノ日のアルヲ以テ爾來元利精算ヲ遂ケ受戻ノ事ヲ申請シタリトノ事實ナレハ控訴人ハ之レニ對シ相當ノ期間ヲ定メ其受戻条件ノ執行ヲ為スヘキコト当然ナルニ右金員調達ノ事ニ疑念ヲ抱キ單ニ其第六号証ノ約定ヲ主張シ被控訴人ノ申請ヲ拒絕シタルハ抑其當ヲ得タリト云フ可カラス是レ本訴ニ對スル控訴人カ反求ヲ斥クル所以ナリトス

但被控訴代言人於テ弁論中本文受戻代金受授ニ付相當ノ期限ヲ裁定セラレタキ旨申立モ有之本件ノ如キ場合ニハ双方ノ為メ執行期間ヲ設定スルハ必要ト思料シ此言渡ヨリ三十日ノ期間ヲ設定スルヲ以テ被控訴人ハ此期間ニ受戻代金ヲ提供スヘク控訴人ハ其受戻ヲ拒ム可カラス若其期間被控訴人於テ金額ノ提供ヲ怠リタル時ハ受戻權能ヲ失ヒ直チニ控訴第四号條款第二項ノ制裁ヲ受クヘキモノトス右ノ理由ナルヲ以テ判決スル左ノ如シ

明治廿三年二月廿二日仙台始審裁判所カ言渡シタル裁判ハ其當ヲ得サルニ付之ヲ取消ス依テ被控訴人ハ此言渡ヲ為シタル日ヨリ三十日間ニ控訴第一二三号証売買代金貳千五百円ニ濟方当日ニ至ルマテ被控訴第一号証記載ノ利子ヲ加算シ其内ヨリ既ニ控訴人ニ払渡シタル金額ニ戻リ利ヲ付シ之ヲ控除シ殘金ヲ償却シ買戻ヲ執行スヘシ若右日限其執行ヲ怠ル時ハ控訴第四号証條款第二項ニ依リ地所建物其他ノ物件共控訴人ニ引渡スヘシ

但訴訟入費ハ始審終審共各自弁タルヘシ

明治廿三年六月廿三日於宮城控訴院公廷終審ノ裁判ヲ言渡スモノ也

裁判長控訴院評定官	西 湯	納 [㊞]
陪 席控訴院評定官	犬 飼 嚴	磨 [㊞]
陪 席控訴院評定官	町 田 真	秀 [㊞]
裁 判 所 書 記	佐 藤	順 [㊞]

[54]「貸金請求ノ訴訟」(名古屋区裁判所、M23・12・20 判決)

明治 23 年第 271 号

裁判言渡書

愛知県尾張国名古屋市民席貸業

原告人 佐々こう

代人同番戸平民

鈴木桂助

同市滞在平民被告岩田かすへ後見人岐阜県美濃

国中嶋郡平民農当時名古屋市滞在

被告人 岩田義太郎

岐阜県美濃国中高郡平民当時名古屋市角田福次

郎方雇人

被告人 岩田たね

右佐々こうより岩田かすへ外式名ニ対スル貸金請求ノ訴訟ヲ審理シ原告被告双方ノ陳述ヲ聴クニ

本訴被告等ノ抗弁ハ第一甲号証ノ契約違背シタルコトナケレハ甲号証ニ拠リ貸金ノ請求ヲ受ル筈ナク第二被告岩田義太郎岩田たね兩人ハ弁償人ノ位置ニ立ツノミナレハ被告かすへト共ニ本訴請求ヲ受ル謂ナク第三本訴ハ勧解ヲ經由セサルニ付答弁セサル旨ノ三点ナリトス依テ之ヲ審案スルニ

原告カ本訴請求ヲ為スニ先タチ被告ヨリ原告ニ対シ二五八号ノ件ニテ芸妓稼金精算ノ訴ヲ起シタルコト其後即チ明治廿三年七月二日ヲ以テ原告ヨリ被告かすへ立戻方勧解出願シタル末一旦かすへ原告方ヘ立戻リタル処数日ヲ出ズシテかすへハ被告岩田義太郎方ヘ立戻リタル事実ヨリ推考スルニかすへハ捫マ、ニ原告方ヲ脱走シテ甲一号証ノ契約ニ違背シタルモノト謂ハサルヘカラズ從テ原告カ該違約ヲ責メ本訴請求ニ及ヒタルハ不当ニアラス而シテ甲一号証文詞中「聊カ貴家ニ対シ損害相懸不中ハ勿論稼人初メ連署ノ者脱走ホ百事ノ障碍有之節ハ残名ノ者ヨリ速ニ弁償可仕候」トアルヲ以テ觀レハ本人かすへカ原告方ヲ逃走シタルヲ以テ被告兩人カ本訴ニ対シ直接ノ義務ヲ負担スルハ当然ナリトス又被告等於テ本訴ハ勧解ヲ經由セサルニ付答弁セサル旨陳述スレトモ已ニ被告等ハ本案ニ立入り陳弁ヲ為シ居ルニ付其申立ハ自ラ消滅ニ歸シタル者トス

右ノ理由ナルニ依リ判決スル左ノ如シ

被告等ハ連帶シテ本訴請求金ヲ返還スヘシ

訴訟入費ハ被告等ノ負担トス

但被告岩田かすへ一人ニ関スル分即明治廿三年十月廿五日以前ノかすへニ係ル

費用ハ原告人之ヲ負担スヘシ

明治廿三年十二月廿日名古屋区裁判所公廷ニ於テ第一審ノ裁判ヲ言渡ス者也

判 事 東 条 為[㊦]

関連「貸金請求ノ訴訟」(訴訟費用)(名古屋区裁判所、M23・12・20 判決)

明治 23 年第 271 号

佐々コウヨリ係ル貸金請求ノ件訴訟入費取調書

一答書正副 廿弍枚

一訴訟印紙 廿 錢

ノ出頭七度

八月廿九日 九月四日 九月廿五日 九月廿九日 十月一日 十月八日 十月十五日 岩田ヤスエハ本日限出頭ニ不及トノ中渡シナリ

一答書正副 廿八枚 後見人ヨリ上呈ス

一訴訟印紙 廿 錢

一出頭四度

十月廿二日 十月廿五日 十月廿七日 十月三十日

一御裁判言渡謄本印紙料

ノ

右之通り御届候也

岩田かすへ後見人

岩 田 義太郎

明治廿三年十二月廿日

名古屋区裁判所監督判事西本殿

明治 24 年

[55]「貸金請求事件」(根室地方裁判所、M24・10・10 判決)

明治 24 年(リ)第 29 号

判決原本

北海道根室国根室郡平民質屋営業

原告 本 間 ス ミ

全道全国全郡本間省三方寄留山形県士族

右訴訟代理人 内 海 義 彦

全道全国全郡平民貸座敷渡世

被告 柳 瀬 ミ ツ

前全人大

被告兼右訴訟代理人

小 河 千代造

右当事者間ノ貸金請求事件ニ付当地方裁判所ハ判決スルコト左ノ如シ

原告請求相立タズ訴訟費用ハ原告ノ負担タルベシ

事実

原告ハ明治廿四年三月中金貳百五拾七円七拾五錢ヲ同年七月三十日返済ノ約ヲ以テ被告兩名ニ貸付タルニ期限経過スルモ弁済ヲ了セサルニ依リ今般出訴及ヒタルニ被告ハ本訴貸金ノ原因ニ溯リ被告カ義務ノ不履行ハ訴外今間亀代等ノ娼妓廃業ニ起因スルヲ以テ乙第一号証ニ基キ更ニ返済方法ヲ議定シタル後ニ非サレハ原告ノ請求ニ応シ難シト申立ルモ亀代ノ廃業シタルハ全人ヨリ被告ニ係ル訴訟上該裁判ノ効果ニ依リ又長尾折野カ廃業セシハ乙第三号証ニアルカ如ク原被互ヒノ承諾ニ出テ而テ該承諾ナルト同時ニ乙第一号証ノ約定ハ共ニ消滅シタルモノナレハ甲第一号証ハ純乎タル借用証書ニシテ被告ノ弁済義務ハ已ニ明治廿四年七月三十一日ヲ以テ発生シタリ左スレハ原告当度ノ請求ハ毫モ不当ノ廉ナシ又被告カ提供スル判取帳ノ内三月一日ヨリ全十一日迄四円四拾五錢ノ三口ハ甲第一号証作成以前即チ旧証券二百円ニ対スル入額ニシテ明治廿四年三月十九日付新証券^(マ)ニ管係セズ右ノ理由ニシテ本訴貳百五拾七円七拾五錢ニ対シ僅カニ八円五拾五錢ノ入金アルノミ依テ淹滞殘金貳百四拾九円貳拾錢ニ制限法ノ利子ヲ添ヘ速カニ弁償受度シト云フニアリ

被告ハ甲第一号証ヲ原告ニ交付スルト同時ニ乙第一号証ヲ原告ヨリ領収シ依テ被告ハ乙号証契約ニ基キ明治廿四年三月ヨリ四月迄ノ間ニ合計金拾參円ヲ原告ニ入金シタリ然ルニ五月及ヒ六月ノ候今間亀代代長尾折野ハ引續キ娼妓廃業為シタルニ依リ甲第一号証ノ義務ハ乙第一号証三項ノ明文ニ拠リ實際履行シ能ハサルモノトナリタリ故ニ原告ハ甲第一号証ノ殘金額ヲ請求セント欲セバ則チ乙第一号証ノ

契約ニ基キ被告ニ対シ更ニ返済方法ヲ商議シ其弁済期限ヲ確定シタル後ニ非サレハ被告ノ義務ハ未タ発生セサルモノトス而シテ原告ハ被告判取帳ノ四円四拾五銭ハ甲第一号証作成即チ明治廿四年三月十九日以前ニ係ルヲ以テ本案甲第一号証ニハ管係セサル旨申立レトモ其実際タルヤ甲第一号証ト乙第一号証ヲ互ヒニ交換セシハ明治二十四年三月十九日ナルニ契約実行ハ三月一日ニ始マル故ニ判取帳ハ即チ三月一日ヨリ順ヲ追フテ記入シ原告ノ認印ヲ受ケタリ以上ノ理由ナルヲ以テ原告当度ノ請求ニ応シ難シト云フニアリ

理由

原告提供スル甲第壹号証ハ純然タル借用証書ニシテ被告ニ於テ弁済ノ義務アルコトハ毫モ疑ヲ容レスト雖モ原告ハ該証書ヲ受領シタルト同時ニ被告ニ対シ乙第壹号証ヲ交付シタリ今該証契約ノ如何ヲ審究スルニ甲第壹号証標記ノ金額ハ元來信用上ノ貸借ニシテ被告ノ返済方法ニ付テハ原告ニ於テ今間亀代外一名ノ娼妓ヲ被告方ニ寄留營業セシメ亀代等ニ対スル貸金ト娼妓揚代金ヨリ被告ニ対スル貸金ハ酒肴料ヲ以テ返済ニ充当セシメ而テ亀代等カ廃業又ハ寄留ヲ乞フモ彼等ノ負債完済迄ハ可成之ヲ抑留シ若シ事情不得止シテ廃業ニ至リシ時ハ被告ニ対スル貸金ハ原告ニ於テ更ニ弁済方法ヲ協議スルトノ文詞アリテハ原告ノ都合ヲ計リハ被告ニ対スル恩恵ノ旨趣ニ出テタルモノトス然リ而シテ該証ノ所謂酒肴料ナルモノハ彼ノ娼妓揚代金トハ密着ノ管係ニシテ亀代等ノ廃業ハ其起因裁判ノ効果ニ依ルト或ハ原被ノ承諾ニ出ルト否トヲ問ハス其廃業シタルカ為メ被告ハ予期ノ酒肴料ヲ得ル能ハス從テ債務履行ノ目的ヲ失ヒ僅カニ金拾參円ノ外残額ノ義務ヲ履行シ能ハサルニ至リシハ不得止ノ事実ナリトス況ヤ折野ノ廃業ハ原告ノ承諾ニ出テタルコトハ乙第二号証書面ニ徴シテ明了ナルヲヤ果シテ然ラハ原告ハ殘金貳百四拾四円七拾五銭ハ乙第一号証三項ノ明文ニ基キ被告ニ向テ更ニ弁済方法ヲ議定セサル可カラサルハ当然ナルニ事茲ニ出テス直ニ甲第一号証ニ拠リ受取殘金請求ヲ為シタルハ不当ナリトス將又原告ハ被告提供スル判取帳中四円四拾五銭ノ廉ハ甲第壹号証受領前ニ係ル旨申立ルモ被告ニ於テ乙第一号証ヲ授受セシハ明治廿四年三月十九日ナルモ該契約ハ三月一日ニ始マルヲ以テ判取帳モ其順序ヲ追ヒ記入シタル旨申立依之該判取帳ヲ閱スルニ「金壹円三拾錢三月一日分金壹円九拾錢三月三日受取金壹円貳拾五錢三月十一日受取」云々トアリテ如斯少額ノ金員ヲ僅々ノ日数間ニ數回ニ弁償スルカ如キハ畢竟乙第壹号証第二項ニ所謂「貴殿ニ於テ」云々「返済

ノ道不相立ニ付全人等〔娼妓今間亀代等ヲ云フ〕ノ稼高酒肴料ヲ以テ返済ニ当テタル者ニシテ以后其時々入金ス可キ事」云々ノ文詞ニ適合ス左スレハ乙第一号証ハ仮令三月十九日ノ日付ナルニモセヨ其契約ハ既ニ三月一日ヨリ実行シタルモノナレハ判取帳中一日三日十一日三回ニ入金シタル四円四拾五銭ハ則チ本訴貳百五拾七円七拾五銭ノ内ニ弁済シタルモノト看做サ、ルヲ得ス依テ明治廿四年三月十九日付ノ新証券ニハ管係セストノ原告ノ陳弁ハ採用セス

明治廿四年十月十日

根室地方裁判所民事部

裁判長判事	小	野	保
判 事	渋谷	十	郎
判 事	黒	澤	太